
ワンピース！大海賊団暁暴れる。

雷光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンピース！大海賊団暁暴れる。

【Nコード】

N0916W

【作者名】

雷光

【あらすじ】

世はまさに大海賊時代！

この広いグランドラインでとある海賊団現る！
その海賊団名を暁と申す。

暁の物語が今始まる！

プロローグ(前書き)

プロローグ

プロローグ

世はまさに大海賊時代！

この広いグランドラインにとある海賊団が現れる。

その海賊団はロジャー時代に現れ、そのロジャーでさえ手も足も出なかったと言う。

そして、その海賊団は不思議な技や能力を持ち、たとえ自然系能力者^アで攻撃が当たらないと言われててもその海賊団の前では無意味だと言われている。

そう、その者たちの技や能力には全て覇気みたいのが施されている。さらに体が特殊らしく物理攻撃もロギアに通じるらしい。

その者たち海軍にも恐れられている。何故なら一度、その海賊団によって本部を破壊されているからだ。

その海賊団！人数は21人！
しかしあまり力についての情報がない。

そして全員億越えの海賊である。

世はまさに大海賊時代！
ロジャーが公開処刑され、新たな時代始まる。
大秘宝ワンピースを求めて！

その海賊団、動き出す。

その海賊団！名を暁と申す。

ワンピースを求めて！

キャラ紹介（前書き）

キャラ達です。

キャラ紹介

海賊団名：暁

旗には赤い雲模様がある。

船長：長門

目に輪廻眼をやどしており普段はペインを操っている。原作と違い外道魔象による体の不自由さはない。ただし操っている時は動けない。

輪廻の長門：12億8000万ベリーの賞金首

ちなみに船長以外役職はありません。

ペイン（天道）

原作通り弥彦の体。引力と斥力の力を使う。

天道のペイン：8億5000万ベリーの賞金首

ペイン（地獄道）

地獄のような幻術をかける。また戦闘不能になったペインを蘇生することが可能。さらに幻術を見せて魔象に相手の魂を吸収することができる。

地獄のペイン：8億3000万ベリーの賞金首

ペイン（修羅道）

身体能力がずば抜けて高く、体にあらゆる兵器が仕込んである。

修羅のペイン：8億4000万ベリーの賞金首

ペイン（餓鬼道）

相手の物理攻撃以外の技を吸収することができる。さらに吸収することでチャクラを回復することが可能。

餓鬼のペイン：8億ベリーの賞金首

ペイン（畜生道）

契約した口寄せ獣を口寄せすることができる。その他にもペインを口寄せしたり輪廻眼を持つ獣を口寄せしたりすることが出来る。

畜生のペイン：8億1000万の賞金首

ペイン（人間道）

相手の脳から情報を得ることが可能。さらに情報を見ることで魂をも抜くことが可能。

人間のペイン：8億2000万ベリーの賞金首

小南

得意な紙を使った術を用いる。チャクラ量は長門と同じくらいある。とても強い。

式紙の小南：8億ベリーの賞金首

うちはマダラ

うちは一族の1人？目に写輪眼をやどしており万華鏡写輪眼も使える。

仮面のマダラ：得体がしれないところから9億ベリーの賞金首

大蛇丸

原作と違い暁を抜けていない。かの三忍の1人でとても強い。

大蛇の大蛇丸オロチマル：7億6000万ベリーの賞金首

うちはイタチ

うちは一族の1人でサスケの兄。不治の病はない。目に写輪眼をやどしており万華鏡写輪眼も使える。

赤目のイタチ：7億8000万ベリーの賞金首

千柿鬼鮫

イタチと共に行動している。水遁を得意とする。チャクラは尾獣並み！

鮫肌の鬼鮫：7億3000万ベリーの賞金首

飛段

不死身な体を持つ謎な人間。そしてもっとも恐ろしい能力を持っている。

不死の飛段：6億5000万の賞金首

角都

飛段と共に行動している不死コンビの1人。心臓を5つストックしており、倒すのは困難。

不死の角都：6億3000万ベリーの賞金首

デイダラ

サソリと共に行動している。自分の作る芸術が好きで爆発を芸術としている。

芸術のデイダラ：6億8000万ベリーの賞金首

サソリ

デイダラと共に行動している。普段はヒルコに入っている。サソリが使うクグツ（ヒルコ含む）には全て毒が仕込まれている。

砂のサソリ：6億6000万ベリーの賞金首

水月

水遁を得意とする。サスケと共に行動している。

水の水月：3億3000万ベリーの賞金首

重吾

殺人衝動にかられる超危険な人物。普段はおとなしいが戦闘に入ると狂い出す。

呪印の重吾：4億8000万ベリーの賞金首

香燐

相手のチャクラ（力や能力）を見て理解することが出来る。戦闘能力はないが、覇気を使える。そしてサスケと共に行動している。

香水の香燐：2億3000万ベリーの賞金首

うちはサスケ

うちは一族の生き残り。目に写輪眼をやどしており万華鏡写輪眼も使える。水月や香燐や重吾と行動している。

迅雷のサスケ：7億2000万ベリーの賞金首

ゼツ

得体の知れない人物。相手にまわりついて乗っ取ることもできる。

二重のゼツ：8億ベリーの賞金首

と今の暁海賊団のメンバーです。今後増えるかもしれませんが、どうなるかは分かりません。暁以外のNARUTOキャラはいません。

第一章 砂漠のクロコダイル 第一話 ウィスキーピーク（前書き）

戦闘シーンは妄想してください。

第一章 砂漠のクロコダイル 第一話 ウィスキーピーク

世はまさに大海賊時代！大秘宝ワンピースを求めて今日もグランドラインを突き進む。

ゴムゴムの実を食べてゴム人間となった麦わらのルフィーとその仲間達はグランドラインに入り、ウィスキーピークに来ていた。麦わらの一味は知らないがここは賞金首が集まる場所である。そう、この集団は全員バロックワークス！麦わら海賊団は畏にハマっていたのだった。

一方そのころとある二人組もここに来ていた。

「????」何で俺らがこんなとこにこなきゃならねーんだ。うん」

「????」忘れたのかデイダラ。今回の俺らの任務はバロックワーク

スのナンバーを倒して親玉を探し抹殺することだ。」

デイダラ「へいへい分かってますよ。サソリの旦那。」

サソリ「分かっているなら黙って任務を遂行しろ。」

そう、ここウイスキーピークに来ていたのは暁海賊団のデイダラとサソリである。彼らはリーダーの命令で任務を遂行しに来ていた。

デイダラ「しかし、バロックワークスって何人いるんだ？うん」

サソリ「知るか。それより見てみる。」

デイダラ「うん？あれは……………最近上がってきた麦わらとその味じゃねーか。うん」

サソリ「しばらく様子見た。」

デイダラ「分かったぜ。うん」

そしてウイスキーピークでは盛大に麦わら海賊団を祝っていた。麦わら達に襲いかかる魔の手に気付かずに。

それからしばらくして

麦わら達が寝静まった後ソロとナミをのぞくついにバロックワークスが正体を現した。人数はざっと100人近く。その中にMr・9とMr・8のナンバ―持ちがいた。勇敢にもゾロが立ち向かっていくが人数が多いのか少し苦戦していた。

そのころ、この二人も動いていた。

デイダラ「おお！ナンバー持ち二人みっけ。」

サソリ「お前はあのナンバー持ちの相手をしろ。町を破壊するかどうかはお前しただい。俺はここにいる。」

デイダラ「うん？サソリの旦那にしちゃ珍しいな。まあ元々そうするつもりだからいいけどな。うん。じゃっ見張りは頼んだぜ。旦那

」

サソリ「早く終わらせてこい。」

デイダラはでかい鳥を作りその上に乗ってウイスキーピークの上空にきた。下ではいまだに争いが続いている。

デイダラ「さてと、サソリの旦那のためにさっさと終わらせるか。うん」

デイダラは我愛羅捕獲のために使った超大型の爆弾をウィスキーピ
ークの上空で作った。

デイダラ「さて、おいらの芸術の始まりだ。うん！じゃ、まずは
2 爆弾投下！」

デイダラは小型の爆弾を無数に降らした。

地上ではそれに気付かずにまだ戦っていた。だが、ゾロは見てしま
った。無数に何かが落ちてくるのを。それらが地面についた瞬間に
「喝！」と聞こえたと思ったらいきなり爆発した。

ゾロ「うは、これはやべー！ん！！！！！！な！！！！！！なんだよ
あれは」

ゾロは見てしまった。空に浮く出かい羽の生えた物体を。そしてゾ
ロは思った。今も降り注ぐ小さい爆弾で人1人は確実に死ぬ。しか
し、あれがもし落ちてきたらそんな比ではない。この町ごとぶっ飛
ばすきか。

ゾロは起きているナミにことの説明をし、麦わら達をつれてダックスで逃げていった。ちなみにバロックワークスは突然の爆発で混乱していた。Mr.8はビビをカルーに乗せて麦わら達を追いかけさせた。

デイダラ「さて、そろそろおいらの芸術を見せてやるかな。フン……

喝

「!

ドオオオオオオン

この爆発により町消滅。島の面積も減った。麦わら達は船に乗り脱出。ビビをつれて。原作通りに。アラバスタへと向かっていった。ルフィはこの仕業をクロコダイルの仕業だと思い込み密かに怒っていた。

サソリ「デイダラのやつ、本当に町ごと破壊したか。だが、どのみちMr.9とMr.8は倒した。後はMr.5お前を倒す。」

Mr・5「まさか、ここに暁がいるとは思わなかった。いくらボムボムの実を食べた爆弾人間でもこいつはやつかいだな。」

サソリ「お前に一つ聞きたいことがある。」

Mr・5「何だ？」

サソリ「親玉は誰だ！」

Mr・5「さあな。俺は知らない。クロコダイルが親玉なんて知らないなあ。」

サソリ「クロコダイルか。」

Mr・5「なあ！口が滑った。くそ……………手強い。」

サソリ「まだ何もしてないがな。では、お前も消えてもらおう。そ

この付き人もな。」

サソリ（ヒルコ）は口から毒ガスを発射。これによりMr・5と付き人死亡。

あつけな！！！！てか付き人扱いかよ。
e n d

第一章 砂漠のクロコダイル 第一話 ウィスキーピーク（後書き）

おまけ

暁海賊団の長門がいる部屋に小南がいた。

小南「ちよっ長門……………何をして……………」

長門「これくらいはいいだろっ。小南」

小南「良くないわ。だけど……………まあ……………いいわ。」

長門「そうか。ありがとう小南。」

小南「ええ。それじゃ頑張ってるね。部屋の改造……………!!」

長門「ああ。」

おまけでした。

第二話

アラバスタへ（前書き）

第二話です

第二話 アラバスタへ

ウイスキーピークで情報を得たデイダラとサソリは船でアラバスタへと向かっていた。その船の中で幻投身の術で長門に報告していた。

デイダラ「という訳でバロックワークスの黒幕はクロコダイルらしい。うん。」

長門「そうか。クロコダイルか。厄介な相手だ。二人とも気をつけるよ。」

デイダラ「問題ないぜ。おいらの芸術の前じゃな。うん。」

サソリ「……………」

長門「では術を解く。」

そして術を解かれクロコダイル抹殺のためにアラバスタへと向かっていった。

一方クロコダイルはというと

クロコダイル「麦わらか……………だが俺の相手ではない。」

と手配書を見ながら言っていたら、鳥から情報が来た。

クロコダイル「何だ。……………何だ
と！！ウィスキーピークに暁がいたと。人数は2人。……………
……………こいつらは！！！」

クロコダイルが見たものにはこう書いてあった。

芸術のデイダラ：懸賞金6億8000万ベリ

砂のサソリ：懸賞金6億6000万ベリ

クロコダイル「どちらとも億超えの海賊じゃねーか。狙いは……俺か。くそ、俺はとんでもねえ連中に目を付けられた。」

クロコダイルは暁海賊団に目を付けられていた。

なぜクロコダイルがこんなに恐れるのかというと、億超えの賞金首というのもあるが、1人1人が白ひげ並みかそれ以上と噂されており目を付けられる、もしくは出会ったら逃げると言われるくらいの海賊である。

クロコダイルは会ったことはないが暁の恐ろしさは知っている。現に報告書にMr.9とMr.8、Mr.5がウィスキーピークで町ごと葬られたと書かれている。

さらに町を破壊したのがデイダラー1人らしく、サソリは特に何もしていないと書かれている。

ただでさえデイダラだけでも強いのにサソリまで相手をするとなると厄介きわまりない。

それにデイダラの能力は爆発系と分かっているがサソリの能力は未だに分かっていない。こんなに恐ろしいことはないのだ。

だが、クロコダイルはこんなところで計画をあきらめる筈がなく、暁への対策を考えていた。

一方そのころデイダラ達は一隻の大型海賊船に追われていた。その海賊団の名前は

ドン・コキユートス海賊団！懸賞金1億1000万ベリーのコキユートスを船長とする海賊団である。

ドン・コキユートス：懸賞金1億1000万ベリー
ビリビリの実のロギア系能力者の電気人間である。ゴロゴロの実ほど強くはないが最高10万ボルトまでさせる。

アイアン：懸賞金8000万
テツテツの実の超人系能力者の鉄人間である。

とデイダラ達の船はこの能力者がいる海賊団に襲われていた。ちなみにこの海賊団は追っているのが暁と知らない。なぜならデイダラ達は小型の船に乗っており、旗もつけてないので暁だとは分からないのである。
しかし、何故追われているのかというと、コキユートス海賊団の目の前を横切ったという理由で追いかけている。

デイダラ「ちっあいつらじつじついぞ。」

サソリ「そろそろウザくなってきた。今回は俺がやる。デイダラは引っ込んでろ。」

デイダラ「あいよ。(今のサソリの旦那は誰にも止められねーな。うん。)」

サソリ(ヒルコ)はジャンプして海賊団の船に乗り込んだ。

コキュートス「なっその黒に赤い雲模様の羽織りは……………まさか」

船員「暁だ——————!!!!!!」

船の中は混乱状態になっていた。だが、サソリは止まらない。

サソリ「貴様達は俺の手で殺してやる。」

そういうとサソリは尻尾を振り回して船員達を薙払い、体のあちこちから毒針やクナイを無数にだして倒していった。
そして残るはアイアンとコキユートスの二人だけとなった。

コキユートス「こんなことが………こんなことがあつて
たまるかー」

アイアン「船長！ここは俺が相手をするぜ。」

サソリ「お前が俺の相手か。せいぜい楽しませてくれよ。」

アイアン「いくぜ。メタルショット」

そういうとアイアンは手を鉄に変えてサソリを殴ろうとしたが尻尾でガードされた。

アイアン「何？俺のパンチをガードしただと！！！！！」

サソリ「終わりか？ならこっちから行くぞ。ガアアアア！！」

ヒルコの口が開いたと思ったら中から相手を捕縛するアーム見たいのが高速で出てきた。

アイアン「な！何だかしらねーが当たるわけにはいかねー。」

アイアンはそれを全力で避けていた。だが

サソリ「いつまでも避けられると思っなよ。」

今度は両腕からもアームが飛び出しアイアンを捉えた。

アイアン「し、しまった。」

アームはアイアンをグルグル巻いて逃げられないように固定した。

サソリ「貴様はこれで終わりだ。」

そういうと勢いよくサソリの方に引っ張り、中に閉じ込めるクグツを出した。

そしてアイアンはクグツの中に閉じ込められた。

アイアン「ちっこくから出しやがね。アイアンショット!」

だがビクともしない。

サソリ「終わりだ。」

そういうとアイアンの悲鳴と共にクグツの中から大量の血が漏れで
ていた。

何が起こったのかというと、このクグツの中にはあらゆる能力者の
能力を無効にする毒が充満しておりそのせいで鉄の体は元の体に戻
り、その後クグツ内で串刺しされてあぁなってしまったのである。
これを見たコキュートスは顔が青ざめていた。

コキュートス「頼む。見逃してくれ。そうだ。あんたらのためにだ
つたら何でもするから。」

もはやロギア系能力者の威厳はなかった。

サソリ「何でもか？」

コキュートス「あっああ。何でもだ。何でもする。」

サソリ「そうか。なら死ね。」

グサッ

コキュートス「う……………」

尻尾で腹を貫かれてしまった。

コキュートス「なっ何で……………」

サソリ「何…………何でもすると言ったのはお前だ。」

コキュートス「くそっ……………ぐっ」

サソリ「毒が回ったか」

コキュートス「毒……………だと……！」

サソリ「俺が扱う物には全て毒が仕込んである。ほんの少しのキズでもそこから俺の毒が入り込む。まっ腹を貫かれたんだ。毒が回らないほっがおかしいがな！」

コキュートス「くそっ……………なら……」

サソリ「ん？」

コキュートス「どうせ死ぬなら……………」

サソリ「なっ！……！」

コキュートス「みちづれだ……！……！……！……！」

ドオガオオエン

コキュートスは船ごと電気を体内で暴発させて大自爆した。もちろんサソリも巻き添え。

デイダラ「おいおい、まさかサソリの旦那やられちゃったんじゃないのか……！」

コキユートス海賊団の船があったところには船のもくずしか残って
いなかった。

デイダラ「マジで旦那死んじまったか。」

サソリ「誰が死んだだと！」

デイダラ「おつ旦那生きてて……………つて誰？」

サソリ「これが本当の姿だ。」

サソリはさっきの爆発をもろに受けたが受けたのはあくまでヒルコ
なのでサソリ本体にはダメージがなかった。
だがヒルコが受けたダメージは相当な物で尻尾以外バラバラになっ
てしまった。

サソリ「ヒルコをアラバスタに着くまでに直さないとな。」

デイダラ「まさか旦那がこんなに若いとは驚きだ。うん。」

サソリ「このことは誰にもしゃべるなよ。デイダラ」

デイダラ「どうしてだ？うん。」

サソリ「切り札は誰にもしゃべりたくないものだ。」

デイダラ「了解。じゃっアラバスタへ向かうとするか。うん」

とデイダラ達のアラバスタへの航海はまだまだ続く。

第三話

謎（前書き）

第三話です。

第三話 謎

世はまさに大海賊時代。その中で謎の目的を果たそうと動く暁海賊団！その真実は未だに分からない。だがついに暁海賊団が本格的に動き出した。その謎の目的を阻止しようと動く海軍。
いざ、この物語が始まる。

前回までのあらすじは

暁海賊団の船を追う海賊団コキユートス海賊団。それをうざく思ったサソリがコキユートス海賊団と戦い、サソリのヒルコがバラバラになるも見事に勝利をおさめた。

あんな出来事が起きていた時、海軍は

ドタドタドタドタ

ゴン

海兵？「失礼します。センゴク元帥！」

センゴク「何事だ！」

海兵？「申し上げます。グランドラインのウイスキーピークで暁と
思われる二人組が目撃されたとのことです。」

センゴク「なに……………暁だと！！それは確かなのか。」

海兵？「目撃情報によると黒の生地で赤い雲模様の羽織りを身に付
けており、一人は金髪。もう一人は尻尾があつたとのことです。」

センゴク「……………黒に赤い雲模様……………確かに暁だな。
とするとその二人組は……………」

ボタン

海兵？」「……………（デイダラとサソリは動きだしたか。…
……………）」

海兵？」「ククククうまくやってそうですねデイダラ達は。」

海兵？」「ああ俺たちは時がくるまで能力者を狩り続けるぞ。」

海兵？」「クククク了解です。イタチさん！」

センゴク元帥の部屋

センゴク「でっー一体何があった。」

海兵「はっ！実はウイスキーピークにはバロックワークスという組織の一部がいたんですが、そこに暁が現れてバロックワークスを町ごと葬ったらしいです。」

センゴク「……………バロックワークス……………それを襲う暁。暁め一体何を企んでいる。」

海兵「それと一つ気がかりな噂が……………」

センゴク「噂？」

海兵「はい！何でも最近。自然系。ロギア系能力者が海賊達の中から数が減っていつているという噂です。センゴク元帥は知りませんでしたか？」

センゴク「そんな噂は初めて聞く。だが、それと暁に何の関係があるというのだ。」

海兵「実はこれも噂何ですけど、暁はロギア系能力者を片っ端から

抹殺しているという噂です。」

センゴク「ロギア系能力者を抹殺。」

海兵「ですがあくまで噂ですので」

センゴク「いや……………」

海兵「？」

センゴク「おそらくそれは本当なのだろう。」

海兵「と申しますと？」

センゴク「確かに最近能力者の死亡リストを見ている時、ロギア系能力者の死亡率が高い事には気づいていた。そして今つながった。ロギア系能力者を倒しているのはほとんど、いや、全部ともいって

いいほど暁の仕業だろう。だが、何故暁がロギア系能力者を抹殺するかが分らん。」

海兵「……………確かに暁ぐらいの実力ならばたとえロギアが相手でも大丈夫でしょうし！」

センゴク「そこが問題だ。何故いまさらロギア系能力者を恐れて抹殺しているのが……………ん？恐れる……………そもそも暁がロギア系能力者を恐れるはずがない。そもそも恐れるから抹殺するという考え方はあっていない。ん—————」

海兵「確かにロギア系の能力は強いですけどね。何故抹殺するのか私には到底分かりません。もし恐れているのなら脅してでも仲間にしちゃえばいいのに……………とすいませんセンゴク元帥！海兵の身でありながらいろいろとしゃべってしまってます。」

センゴク「いや、いい……………（仲間か。確かにロギア系の能力は強い。）……………ん？仲間……………ロギア系能力……………抹殺……………????まさか！！……………！！！！」

海兵「どうかしましたか！！！」

センゴク「でかしたぞお前。お前のおかげで一つの謎がとけた。感謝する。そうか、そういうことか。暁はロギア系能力者をただ殺しているのではない。」

海兵「?????」

センゴク「暁には何か特殊な方法を用いて能力者を殺すと同時に能力を吸収しどこかに封印しているのか。これで一つの謎がとけた。」

海兵「おおっなんと。ですがまだ謎があるんですか？」

センゴク「ああ。一つの謎は分かったがまだいくつかの謎がある。一つはその能力をどこに集めているのか。他にもその能力を集めてどうするのか。謎がある。そういえば例の暁……………ええとあった。デイダラとサソリで間違いないな。今はどこに向かっている。」

海兵「恐らくアラバスタに向かっていると思われます。」

センゴク「アラバスタ……………確か今は王国軍と反乱軍が戦争しているときくが何故そこに……………？確か今そこにはクロコダイルがおったか？」

海兵「はい！確かにおります。まさか」

センゴク「ああ間違いないな。これでバロツクワークスを襲う理由も分かった。」

海兵「クロコダイルですか」

センゴク「そうだ。そうか、やつはバロツクワークスの親玉だったか。スナスナの実の砂人間。王下七武海のクロコダイル！」

ドタドタドタドタ

ゴン

海兵「失礼します。暁がコキユートス海賊団を全滅させました。」

センゴク「何だと！！確かコキユートスは1億1000万ベリーの賞金首。しかもロギア系能力者か。」

海兵「懸賞金8000万のアイアンもやられています。」

センゴク「……………これは非常にまずい事態となった。暁の目的は謎だがみすみす見逃す訳にはいかなかった。もはやこれは遊びではない。海軍と暁の戦争だ。」

海兵「はっ……！」

センゴク「急いでアラバスタに軍艦をよこせ。なんとしてでもクロコダイルを暁より先に捕らえるのだ。」

海兵「はっ！急いで軍艦を用意します。何隻用意しますか？」

センゴク「十隻だ。赤犬達も連れていけ！儂は他の七武海にも声をかけよう。」

海兵「了解しました。」

センゴク「（暁め……………好きにはさせんぞ）」

こうして海軍と暁の長い長い戦いが始まるのだった。
ただ一つ他の七武海がすでに暁に乗っ取られているとは知らずに！
！！！！！！

この物語はまだまだ続く！！！！！！

第三話

謎（後書き）

出来れば誰でもいいので暁を入れた小説を作ってみてください。お願いします。

第四話 スモーカー大佐 絶対絶命(前書き)

第四話です。あとがきにおまげがあります。

第四話 スモーカー大佐 絶対絶命

謎の目的を達成するために動く暁海賊団！それを阻止しようと行動する海軍。

まさに世は大海賊時代！

前回までのあらすじは

ついに動き出した暁！センゴク元帥はとうとう暁の目的を阻止することを決意する。一方そのことについて知らないデイダラ達もアラバスタへの航海をするのであった。了

今日もアラバスタへと航海を続けるデイダラとサソリは暇だった。

デイダラ「なあ旦那。アラバスタはいつになっただらつくんだ？」

サソリ「もう少しだ。」

デイダラ「まったく……面倒だよな。能力者狩りは。特に強いやつはいないし。てかなんで集める必要があるんだよ。うん！」

サソリ「忘れたのか！俺らは能力者、ロギア系能力者を倒し、リーダーにかけられている外道吸術封印で能力者から能力を吸収することで自動的にあの場所に能力を封印！そしてその能力達はきたる時にリーダーが輪廻眼で能力を一つにする。その後は俺にも分かんがきたる時には必要になる力だ！今はそれを蓄えるために狩っているのだ！」

デイダラ「ちなみになんでロギア系だけなんだよ。」

サソリ「ロギアは自然！つまりは自然の力が超人系や動物系よりもきたる時に有効になる。それだけだ」

デイダラ「なるほどね。まっ今はアラバスタに行きますか！」

サソリ「それにしてもなんでこんなちっこい船なんだ」

デイダラ「それは俺も思った。今度船でも作りに行くか。」

サソリ「それは俺も同感だ。」

デイダラ「ちなみにそのヒルコっていうクグツは直ったのか？」

サソリ「もうじきだ。」

そういえばいい忘れていたが小型の船に乗ってると言っても部屋はある。分かりやすく言うとサウザントサニーゴーの半分くらい。

デイダラ「それにしても旦那のそれを壊すなんてたいしたやつだっ

たよな。」

サソリ「あれは俺にも予想できなかった。今後のために核の周りをちよつといじつとくか。」

それからしばらく時間がたち夜になった。

サソリ「ようやく完成した。核をいつでも守れるようにおれの意志に関係なく砂鉄が守るようにした。しかもこの砂鉄には触れただけで相手を切り裂き毒を侵入させるようにしてある。防御力はあの爆発に耐えられるぐらいだ。」

デイダラ「なんかいいなそれ。俺もそんなのが欲しいぜ！うん！」

サソリ「しかもこのヒルコはすこし改造した。強度はまえのと変わらないが仕込みを増やした。これで技のバリエーションも増えたというものだ。さっそく俺はこの中に入る。」

デイダラ「うん？もう入っちゃうのか。まあいいか。」

と船の中は話に盛り上がっていた。

翌朝

デイダラ達は夜更かししすぎて爆睡していた。

しかし、今デイダラ達の船は囲まれていた。海軍に！

ちようどアラバスタにきていたスモーカーとたしぎを乗せた軍艦一隻と他の大佐が乗った4隻の軍艦が海軍本部から連絡が入り、待っていたのだ。

スモーカー「ちつ暁のやろつ。この状況でも平然としてやがる。」

たしぎ「乗り込みますか？」

スモーカー「いや、下手に乗り込めばあっちの思いつつぼだ。」

一方曉の船の中では

デイダラ「……………ん？」

サソリ「……………おい、デイダラ」

デイダラ「うん！分かってるぜ旦那。」

サソリ「おれの仕込みを試すか。デイダラは後方だ！」

デイダラ「了解。スモーカーは抹殺するの？」

サソリ「ああ。」

そしてサソリは前方にデイダラは後方に出た。まずはデイダラの視

点から

海兵「大佐！出てきました。」

大佐「こっちは軍艦三隻ある。デイダラのやつを捕まえる。」

海兵「はっ！！」

デイダラ「軍艦三隻か……まっ何隻あるっがおいらの芸術の前じゃ意味ねーけどな」

デイダラはC2を一匹つくり、その上に乗って空を飛んだ。

デイダラ「とりあえずこれでもくらいな」

デイダラは手に小型鳥爆弾を大量に作り、一隻の軍艦に放った。

海兵「おい、何か飛んでくるぞ。」

海兵「まずい。あれは爆弾だ！逃げろー」

デイダラ「……………喝！」

ドュゴーン

軍艦一隻が沈んだ。

大佐「くそっこのままじゃまずい。撃て！撃ちまくれ！」

ドン ドン ドン

デイダラ「おっと！ふーあぶねー！危うく当たるところだったぜ！じ
ゃっめんどくせーから一気に片づけるか！C2ドラゴンー！」

デイダラはC2型の爆弾を二匹作り、軍艦に放った。

大佐「我々もここまでか。」

デイダラ「喝！！！！」

ドュゴーン

軍艦二隻は木っ端みじんになった。

デイダラ「ふう。全然手応えなかったな。」

デイダラは勝利した。

その時麦わらの海賊団はチョッパーを仲間にしてアラバスタに向かっていたが、いきなり近くから爆発音が聞こえたので何事かとのぞき込んだら、一隻の船の周りに海軍がたかっており、海賊と思われる人物が戦っていた。

ナミ「あれって海賊なの？みたところ旗がないんだけど。」

ゾロ「それにしても鳥に乗って戦ってるやつつえーな。海軍の軍艦三隻をあつという間に落とすやがった。たった1人で」

サンジ「うん？どれどれって……………あいつらはやべー！ナミさんここは全速力で通過するぞ。暁が海軍と戦ってる間に！」

62

ナミ「あ……………暁ですってー！こうしちゃいられない。なんとかして逃げましょう。」

ルフィ「何で逃げるんだ？」

サンジ「バカやろー。暁だぞ！俺らがかなつようなやつらじゃない。」

ルフィ「そんなのやってみなきゃわかんねーじゃん！」

ナミ「わかるわー！いい？ルフィ。暁のメンバーはみんな億越えの賞金首なの！私達となんてレベルの次元が違うの。それに今はビビをアラバスタに届けなきゃならない。ということで逃げるの。わかった？」

ルフィ「うーん！わかんない。」

ナミ「だめだこりゃ。」

ルフィ「まあいつか。今はクロコダイルだ。やるーども。全速前進でアラバスタに行くぞー！」

麦わら海賊団は通過していった。
一方サソリは

サソリ「後はあんたらだけだ。」

スモーカー「くそつ。」

たしぎ「……………」

船は壊していないがスモーカーとたしぎ以外はすでに海に投げ出されていた。

スモーカー「砂のサソリ」

サソリ「なんだ。」

スモーカー「なぜ暁はロギア系能力者を狙う。」

サソリ「気付いていたか。だが、それを教えると思うか？」

スモーカー「そうか。たしぎ構えておけ。油断すれば死ぬ。それに情報によればやつは全ての攻撃に毒を仕込んであるという。かすり傷でもうければ間違いなく死ぬ。気をつけるよ。」

たしぎ「……………はい！」

サソリ「俺とやる気か。海軍もバカなものだな？ロギアを狙う俺らの前にロギアがいるなんてな。」

スモーカー「ふん！何を言おうが構わんが、お前は今日で最後だ。くらえ、ホワイトブロー！」

腕が煙に変わりサソリにパンチをいれる。が

さあ……………

サソリは砂になって消えた。

と思ったらたしぎを遠くに投げ飛ばしてスモーカーの真後ろにいた。

スモーカー「なっいつのまに！」

サソリ「あれは俺の砂分身だ。残念だったな。」

サソリは尻尾で刺そうとしたがケムリになって距離をおかれた。

サソリ「ちっ！」

スモーカー「あぶねー。もうちょっとで腹に穴があくところだったぜ。」

サソリ「だがそれで距離を置いたつもりか。くらいな。」

サソリは新しく仕込んだ仕掛けを発動した。両肩から小型ミサイルを発射してスモーカーに向かっていった。

スモーカー「何、ミサイルだと！当たる訳には行かねー。」

スモーカーは避けていくがミサイルがとんでもないことになった。なんとミサイルがさらに小型に分裂して、爆弾といっしょにスモーカーに突っ込んで

デュゴーン

サソリ「やったか……………」

爆発でサソリとスモーカーが乗った軍艦が沈んだ。サソリは自分の船に着地した。

スモーカー「あぶねー。」

なんとスモーカーは無事だった。たしぎをつれて。

サソリ「よく無事だったな。あの爆発で。うん？」

ドガン。

サソリ「ちっ……………」

なんとスモーカーはただ避けただけではなく爆弾を暁の乗っている船に投げていた。

スモーカー「てめーらはこれで逃げ場はなくなった。俺らに捕まるか、このまま海に沈んでお陀仏かどっちがいい。」

ちなみにスモーカーは残り一隻の軍艦に乗っている。

サソリ「捕まるか、お陀仏か……………じゃあお前のお陀仏だな。」

スモーカー「何？」

サソリ「仕方ない。特別に見せてやる。」

ポン

サソリはヒルコを脱いだ。ケムリが晴れてスモーカーが見たものは

スモーカー「なっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! 誰だお前。」

サソリ「これが本当の姿だ。さっきまではヒルコというクグツに入っていただけだ。」

スモーカー「それが本当の姿……………ていうことは本気を出していないかったということか今まで。」

サソリ「ああ。そうなるな。」

スモーカー「なんだ。俺には本気でないと勝てないと思ったのか？」

サソリ「いや、それは少し違うな。お前の最後だ。だからここで本当の姿を見せた。それだけだ。」

スモーカー「そうかよ。なら先手必勝だ。ホワイトブロー！」

腕をケムリに変えて殴ろうとするが砂見たいのがサソリを守る。

スモーカー「なっなんだそれは！」

サソリ「これは砂鉄だ。俺の意志に関係なく俺を守る。そして俺の砂鉄に触れた。この意味が分かるか？」

スモーカー「……………まさか!!!」

スモーカーは殴った手を見て気付いた。傷が出来てることを。

スモーカー「ちっ毒か。」

サソリ「俺の砂鉄には相手を傷つけ毒を侵入させる働きがある。これでお前はもうじき死ぬ。」

スモーカー「……………そうか。俺は死ぬのか。だが残念だったな。俺は死なない。」

サソリ「死なない？それはおかしいな発言だな。俺の作った毒に解毒薬なんか存在しない。まあいい。どのみち待つ必要はない。俺のとおきを見せてやる。」

サソリは巻物を取り出し口寄せする。すると一体のクグツが出てき

た。三代目風影のが！

スモーカー「ちっ（毒は体内にケムリを回して進行を遅らせてはいるが早くしなければヤバいな。）」

サソリ「くらいな。」

サソリはクグツを操り、スモーカーの近くまでよせて、口から砂鉄を出させた。

スモーカー「!!!!!!」

サソリ「砂鉄結襲」

砂鉄が槍のように伸びスモーカーの左肩を貫いた。ちなみにスモーカーは毒を体内で押さえているのに精一杯だった。

スモーカー「グオオ……………」

サソリ「まだだ。砂鉄結襲・5連打。」

砂鉄の槍が5回連続でスモーカーの体を貫いた。

スモーカー「グオオ……………くっ……………ち……………く……………し
よ……………」

サソリ「まだ息があるのか。しぶといやつだ。それにそんなだけくら
つてたら毒はすでに全身に回って死んでる筈なんだけどなあ。まさ
か本当に毒をくらってないのか……………それとも能力で毒
の進行を遅らせているのか。まあ多分後者だな。」

スモーカー「……………ぐっ……………グ……………
……………ゾ……………ガ……………」

デイダラ「サソリの旦那やることがえげつねーな。うん。」

デイダラは空から見ていた。ちなみにサソリの乗っている船は今も
沈みかけている。

サソリ「あんたは頑張った。ここまでよく粘ったとほめてやる。」

スモーカー「……………(くそ……………体が動かね

ー……………俺は死ぬのか)……………」

サソリ「今すぐ楽にしてやる。」

e n d

今回はここまでです。続きをお楽しみに！

第四話

スモーカー大佐

絶対絶命（後書き）

おまけ

長門（幻投身）「どうだ。能力の方は」

マダラ「今の所順調だ。」

長門（幻投身）「何故ロギアだけを狙うんだ？別にこの像はロギア以外でも吸収可能だろう。」

マダラ「そうだ。超人系。動物系でも吸収できる。ロギアを狙うのは戦力を削るのもう一つ大きな役割がある。」

長門（幻投身）「あれの復活か……………」

マダラ「そう、あれの復活にはロギア的能力を集めなければならぬい。」

長門（幻投身）「この島にいるエネルギーはどうする。」

マダラ「大丈夫だ。エネルギーはすでに俺の下についている。いずれここに封印するさ。この能力無限吸収像にな」

長門（幻投身）「なら俺も来たる時のためにこの術を完成させなければな。……………外道輪廻・神命創造の術をな」

おまけ終了

キャラ設定一部訂正（前書き）

設定の方で一部指摘がありましたので修正しました。

キャラ設定一部訂正

ペイン（地獄道）

魔像を出し、口から手のような物を出して相手の魂を抜くことが出来る。さらに、口の中に入れることで肉体の修繕や死体を蘇生することも可能。ちなみに懸賞金は変わりません。

ペイン（人間道）

人間道は情報を見て魂を抜くとありましたが情報を見なくても魂を抜けます。

今回訂正したのはまあ設定の方で指摘があったので直させていただきました。また何かが違うと思ったら指摘してください。また、途中からサソリみたいに原作と違うところが出てくることもあると思います。ご了承ください。今回の訂正はとりあえず以上です。

第五話 大蛇丸登場〜海軍アラバスタ到着（前書き）

第五話です。もうほとんど原作無視です。なので能力とか術とかが原作と違う可能性があります。ご了承ください。

第五話 大蛇丸登場〜海軍アラバスタ到着

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男、海賊王ゴールドロジヤー！彼の死に際に放った一言は人々を海に駆り立てた。男たちはグランドラインを突き進んで夢を追い続ける！

前回までのあらすじは

スモーカー率いる海軍の軍艦に囲まれてしまった暁海賊団デイダラとサソリは海軍との激闘を繰り広げる。その中でサソリはスモーカーと戦い今まさに優勢の状況である。

あらすじ了

サソリ「今すぐ楽にしてやる。」

サソリはそう言つとクグツを操り口から大量の砂鉄を出した。

デイダラ「うお。これはやべーな。もうちょっと離れるか!」

スモーカー「……………何を……………ハアハア……………するつもりだ。」

サソリ「これであんたは終わりだ。ソオラアアア!」

砂鉄が空中に集まる。そしてクグツの胸が開いたと同時に

サソリ「砂鉄界法!!!!!!」

スモーカー「? (ここまでか)」

砂鉄が無数に槍を作り軍艦を壊しながらスモーカーとたしぎを貫こうとしたその時

サソリ「?何？」

スモーカーとたしぎは急に姿を消した。砂鉄はそのまま最後の軍艦を破壊した。

サソリ「……………消えただと?一体何が……………」

デイダラ「旦那!後ろだ。」

サソリ「何!?!」

????「やさかにのまがたま」

無数の光の弾丸をサソリはもろにくらった。

サソリ「……………俺の砂鉄が追いつかない。」

サソリは船ごと攻撃され吹き飛んだ。さっき攻撃してきたやつはいつのまにかいなくなっていた。

デイダラがあたりを見渡すと少し離れた位置に軍艦5隻が姿を現した。

ちなみにこれは海軍本部からやってきた軍艦である。

もう半分の5隻はというとすでにアラバスタに着いていた。

デイダラ「ちつ次から次へと邪魔しに来やがって。」

「……………あれ、まだいたの。それにしてもコワイネ！ 暁は。スモーカー大佐をここまで追い込むなんて。」

「……………仕方ない。お前の痛みをとってやる。」

デイダラ「……………海軍大将黄猿……………ボルサリーノと王下七武海バーソロミュー・くま！ ち俺のやりにくい相手が来やがったか！」

そう今ここにきているのは海軍大将黄猿と王下七武海のバーソロミュー・くま率いる軍艦5隻である。ちなみにくまは超人系悪魔の実、ニキユニキユの実の能力でスモーカーから痛みと毒を抜き取り今も手に留めている。スモーカーは一命を取り留めた。

デイダラ「おいおい、旦那が与えたダメージがなくなるってありがたいよ。」

くま「お前にこれを（痛み）くれてやる。圧力砲。」

スモーカーのダメージがのった圧力砲がデイダラめがけて飛んできた。

デイダラ「そんならいじゃ俺にはあたん……？しまった！」

黄猿「油断はしちゃダメだよ。あまのいわと」

黄猿は足に光を集めレーザーを放つと同時にデイダラを海に向かっ

て蹴った。

デイダラ「ぐわああ！」

ジャボーン

黄猿「ふー！案外アツケナカッタネー！まっ海ん中じゃ生きられん
でしょ。」

くま「……………」

ちなみにスモーカーは気絶している。

一方アラバスタに到着していたもう半分の海軍はクロコダイルを探
していた。

サカズキ「一体どこにおるんじゃクロコダイル！」

クザン「まあそう簡単に見つからんでしょ。」

ここには海軍大将青雉のクザンと海軍大将赤犬のサカズキが来ていた。ちなみに海軍大将黄猿のボルサリーノとこの二人は自然系悪魔の実の能力者で海軍の最大戦力として担っている。赤犬はマグマグの実のマグマ人間！青雉はヒエヒエの実の氷人間！黄猿はピカピカの実の光人間である。

海兵？「申し上げます。」

サカズキ「なんじゃ！」

海兵？「アラバスタに麦わら海賊団がいるとのことですよ。どういたしますか？」

クザン「麦わらっ？あぁ…あの最近上がってきているモンキー・D・ルフィか！」

サカズキ「そんなひよっこに構ってる暇なんぞありゃせんわ。わしらはクロコダイル優先じゃ！」

クザン「確かに！麦わら海賊団なぞ捕まえようと思えばいつでも捕まえられる！」

海兵？「ではほつっておくと？」

サカズキ「あぁ。今回は見逃しちやるわい。」

海兵？「了解しました。() デイダラとサンリは何をしている。()

一方そのルフィはというとクロコダイルと地下で戦闘中だった。

そしてデイダラとサソリがいる海に戻る。黄猿とくまはいまだに上がってこないデイダラとサソリに疑問を抱いていた。

ボルサリーノ「うん、おっかしいね、いくらなんでも海面に上がってこないのはおかしい。」

サソリはというと海中で砂鉄牢を作り出し、最大級の術の準備をしていた。デイダラもC2の上に乗る砂鉄牢の中にいる。

サソリ「デイダラ！頼んだぞ。」

デイダラ「了解だ。旦那！」

そう言うとデイダラは海面から姿を現してC2ドラゴンの上に乗る、鳥型爆弾を大量に飛ばした。

デイダラ「ふきとびな。喝！」

ドゴーン

くま「ふん。」

くまは爆発を弾き飛ばした。デイダラの方に。

デイダラ「くっ……………」

ボルサリーノ「さすがくま！ん？」

サソリ「終わりだ……………くえ。俺の新たな術を」

海面にサソリが飛び出てきた。砂鉄界法とは比べ物にならないほどの砂鉄が宙に浮いていた。

サソリ「新星砂鉄界法！」

超高速で砂鉄がやりのように軍艦を突き刺していく。砂鉄界法とは比べ物にならない速さである。しかもまだ終わりじゃない。

サソリ「消え失せろ。」

その合図とともに軍艦に突き刺さっている砂鉄やいまだに黄猿とくまを突き刺そうとする砂鉄がさらに細かくなり逃げ道をなくし、大爆発した。

ドカーン

サソリ「……………終わったか！」

デイダラ「さすが旦那！」

サソリとデイダラは海の上に立っている。ケムリがはれたら一隻だけ無傷の軍艦が現れて黄猿とくまが特大の技を放とうとしていた。何で無傷かというときくまが右手で砂鉄を弾き飛ばし左手で爆発を弾き飛ばしていたので一隻だけ無傷だった。しかし、くまの両手は今技を放とうとしていてニキュニキュの力を出せないでいる。

その時

「????」やるなら今ね。」

海面に頭が何個もある巨大な蛇が現れた。

「ボルサリーノ」?

「くま」?

「デイダラ」……………これは大蛇丸のヤマタの術。」

大蛇丸「海軍大将ボルサリーノと王下七武海バーソロミューくま！
あなたたちの命もここまで……………消えなさい。」

大蛇丸を中心として蛇達がエネルギーをためていく。

ボルサリーノ「これは……………マズイ」

くま「……………力が使えない。」

くまは両手で特大圧力砲を使おうとしていたので瞬間移動とかが使えない状況であった。ボルサリーノのも特大のやさかにのまがたまを放とうとしていて不意打ちの大蛇丸に対処できないでいた。

ウィーーン！

大蛇丸から放たれた光線が軍艦を貫いた。そして

ズドゴオオオン

アラバスタ付近の海上で大爆発が起きた。

大蛇丸「ハハハハハハ！」

その破壊力は国一つを滅ぼすほどの威力だった。

サソリ「大蛇丸！」

大蛇丸「あんたたち遅いと思ったたらあんなのに手こずっていたのかしら？」

デイダラ「ふん。少し油断してただけだ。それより何故お前がここにいるんだ？うん。お前はたしかアマゾン・リリーにいたはずだ。」

大蛇丸「あら。せっかく助けてあげたのに……まあいいわ。私の方は任務終了よ。そしたらあんたたちがまだクロコダイルを狩っていないっていうじゃない。あんたたちの仕事はクロコダイル抹殺。さっさと行きなさい。」

デイダラ「っち……………分かったぜ。うん。」

デイダラはC2を作り出すとサソリに

デイダラ「旦那！乗ってくれ。」

サソリ「ああ。」

デイダラ達はアラバスタへと飛んでいった。

ちなみに海軍の軍艦は一隻も海に残ってはいなかった。

一方アラバスタでは

海兵？「申し上げます。」

サカズキ「なんじゃ！」

海兵？「暁海賊団のデイダラとサソリを止めるために戦っていた大将ボルサリーノと王下七武海バーソロミュー・くまが突如現れた大蛇丸の不意打ちにより、軍艦ごと葬られたそうです。」

サカズキ「？なんじゃと！あの黄猿が……………暁め……………絶対許さんぞ」

海兵？「……………」

海兵「おい、お前！うそをつくなよ。大将達ならくまの能力でギリギリ本部に帰還したって先ほど連絡があったぞ。」

クザン「ん？それはどういうことだ？」

サカズキ「……………」

大将達はうそをついた海兵？を睨みつけている。

海兵？「クククっとうします？イタチさん。」

海兵？「……………そうだな。もう隠せない。なら、ここであなたたちを抹殺する。」

サカズキ「なっ！お前たちは」

クザン「やっぱりこいつら暁か！どつりで他の海兵より情報が早いわけだ。なあうちはイタチと干柿鬼鮫。」

イタチ「バレてたのなら仕方がない。目的のためあなた達を抹殺する。」

鬼鮫「クククっ 徐々に腕がなりますネ。」

イタチ「俺は青雉をやる。お前は赤犬だ。」

鬼鮫「了解です。イタチさん。」

こうして赤犬達とイタチ達の戦いが始まる。果たしてデイドラ達はうまくクロコダイルのところまでたどり着けるのか！そして大蛇丸がアマゾン・リリーで成し遂げた任務とは何なのか！
次回をお楽しみに

第五話 大蛇丸登場〜海軍アラバスタ到着（後書き）

おまけ

長門「ついに術が完成した。」

小南「さすがね。後はあれの復活ね。」

長門「問題ない。後は心臓の元となる能力がそろえばいい。来る時までにな。」

小南「……………」

長門「そういえば大蛇丸が任務を遂行した。それのおかげでさらに動きやすくなった。」

小南「そうね。」

おまけ終了

第六話

大蛇丸の任務（前書き）

9月にはいると予定が詰まってるので更新するのが遅くなります。
ご了承ください。

第六話

大蛇丸の任務

富、名声、力、この世の全てを手にした男、海賊王ゴールドロジャ
ー。彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。
男達は夢を追い求めグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

サソリとスモーカーの戦いのさなか急遽あらわれたピカピカの実の
能力者海軍大将黄猿のボルサリーノとニキュニキュの実の能力者王
下七武海のバーソロミュー・くま！

油断していたデイダラとサソリは必死で対抗するもくまの能力にい
なされてしまう。そしてボルサリーノとくまがトドメをさすべく特
大の攻撃をしようとしたところ、大蛇丸が現れて不意をくらい軍艦
ごと破壊されるもギリギリのところでくまの能力により回避！
そしてアラバスタではイタチ達の正体がばれ、こちらでも戦いが始
まりそんな雰囲気である。

あらすじ 了

今回はイタチ達の戦闘を前に少し大蛇丸がやっていた任務について
見てみようと思う。

では、はじめりはじまりー！

暁海賊団 メインデッキにて

長門「やっときたか」

大蛇丸「私にようって何かしら？」

長門「任務だ。」

大蛇丸「任務？何故急に……………」

長門「これは極めて重要で尚且つこの任務に失敗すればきたるべき時に力を発揮することができない。すなわち、失敗すれば今までの行動が全て水の泡になる。」

大蛇丸「そんな大役をこの私に任せてもいいのかしら？」

長門「ああ。」

大蛇丸「……………分かったわ。引き受けましょう。っでどんな任務なの？」

長門「ああ。まずはお前にアマゾン・リリーに向かってもらいたい。」

大蛇丸「アマゾン・リリー？たしか王下七武海のボア・ハンコックがいるところね」

長門「そうだ。そこでまずお前にはハンコックを下部においてもらう。その後、島の中央の地下にあるものを作ってもらいたい。今回の任務はそれだけだ。」

大蛇丸「あるもの？」

長門「それはハンコックを下部に置いてから話そう。」

大蛇丸「分かったわ。その任務成功させてみようじゃないの。フフフフフ！」

長門「念のため、地獄道連れていくといい。ペインでなくとも肉体の修復、蘇生は可能だ。」

大蛇丸「分かったわ。じゃあ私は行くわ。」

長門「ああ。」

そしてしばらく時がたち

大蛇丸「ここがアマゾン・リリーね。」

ペイン（地獄道）「そうだ。まずはハンコックに接触しろ。」

大蛇丸「わかっているわ。」

そしてハンコックがすんでいる所に入り込みハンコックと接触した。

ハンコック「なにやっじや。」

大蛇丸「あら、この装束を見て分からないのかしら?」

ハンコック「……………暁か……………なにしにここへきたのじや?」

大蛇丸「なに……………あなたを私の下部にしようと思っただね。おとなしくなっただはくれないかしら。」

ハンコック「誰がわらわを下部にすると?フン、へどがでるわ」

大蛇丸「あら、ここまで言われると落ち込んだじやうわ。じゃあ二つしましよ。う。」

ハンコック「なんじや?」

大蛇丸「私と勝負しましょう。私が勝つたらあなたを下部におく。私が負けたらあなたが私を好きにできる。それでどうかしら？」

ハンコック「わらわに戦いを挑むか！いいだろう。その勝負受けてたつ。」

大蛇丸「ペイン。あなたは手を出さなくてもいいわ。」

ペイン（地獄道）「わかった。」

そして大蛇丸とハンコックは闘技場にやってきた。

大蛇丸「じゃあ始めるわよ。」

ハンコック「返り討ちにしてやる。」

大蛇丸は素早く印を結んだ。

大蛇丸「風遁大突破」

強烈な風がハンコックを襲う。

ハンコック「くっくとどまりきれない……………」

大蛇丸「あら、この程度なのかしら？」

大蛇丸は吹っ飛んだハンコックの後ろに瞬神の術で移動した。

ハンコック「？いつのまに」

大蛇丸「くらいなさい。草薙の剣！」

大蛇丸は口から草薙の剣をだし、ハンコックの腹を貫いた。

ハンコック「ぐほっ……………（なんなのじゃこやつは……………本物の化け物か）」

大蛇丸「あら、もうおしまいかしら……………つまんないわね！王下七武海の名もただの飾りね。」

ハンコック「くっわらわをなめるな」

ハンコックは刺さった剣を抜き、能力を使い大蛇丸に蹴り込んだ。

大蛇丸「うん？」

大蛇丸は右手でガードするが右手が石化して崩れたことに驚いた。

大蛇丸「金縛りの術よ。これであなたは動くことができない。」

ハンコック「くっわらわをどうする気じゃー!」

大蛇丸「そうね。まだ勝負はついてないしとどめでもさしましよ
うか。」

ハンコック「……………」

大蛇丸「万蛇羅の陣!」

大蛇丸の口から大量の蛇が波のようにハンコックに向かう。

ハンコック「?くるな!くるでない!」

ハンコックは大量の蛇に怯え恐怖していた。
そして蛇がハンコックを囲むと大蛇丸はヤマタの術を発動した。

大蛇丸「ハハハハハハハハハハハハハハハハ！これでとどめよ。」

ハンコック「やめてくれ………やめてくれ！わらわの負けじゃ！
だから、この蛇どもどうにかしてくれ！」

ハンコックは大量の蛇に囲まれ、ちよつと出かい蛇に体を押さえつけられて体を動かすことができないのに正面には馬鹿でかい頭を何個ももつ蛇がエネルギーをためて自分に向かって放とうとしているのに恐怖していた。

だが大蛇丸は優しくなかった。ためていた光線を放った。その瞬間

ドゴーン

アマゾン・リリー消滅

というのは嘘で、ハンコックは気絶していた。

大蛇丸「この程度の幻術で伸びるなんてね。」

そう全てはハンコックと会った時点で大蛇丸の勝利は決まっていたのだ。全ては大蛇丸の幻術により仕組まれていた。

なので大蛇丸の右手は石化しておらず島も破壊されていない。

それからしばらく時がたちハンコックは負けたことを認め、大蛇丸の下部となった。

そしてペイン（地獄道）から今後の任務が言い渡される。

ペイン（地獄道）「ここからが本番だ。」

大蛇丸とハンコックはペインの言葉を待つ

ペイン（地獄道）「この地下に10年たらずでくる日食を利用するある装置を作ってほしい。」

大蛇丸「ある装置？」

ペイン（地獄道）「その装置は神の肉体の構成が終わり完全に復活するまで日食を続けさせる装置だ。」

ハンコック「神じゃとー!!」

ペイン（地獄道）「そつだ。この際だ言っておこう。我ら暁の目的はその日食までに能力者を狩り続ける。しかし心臓がなければ動かない。だから我らは自然系能力者を狩り続ける。自然系の能力は神

の心臓を構成するのに必要不可欠な部分だ。そして日食の時、船長が能力で神の心臓を創造する。心臓ができたら指輪を持つ暁10人で体を構成させる。最後にあの神の魂を入れれば我らの目的は完了する。だが、それだと時間が足りない。神の復活は日食中に行わなければ復活できない。だからこの装置を作るのだ。そしてここが儀式の場所でもある。」

大蛇丸「なるほどね。だからこの任務が成功しないと計画が全てパーってことなのね。」

ハンコック「なるほどのう。そういう計画があったのじゃな！」

大蛇丸「ハンコックにはこの装置以外のことは忘れましょう。」

ハンコック「……………なぜじゃ！絶対このことは誰にもしゃべるつもりはない。」

ペイン（地獄道）「まあいいだろう。だが、お前にはこの術をかけておこじろ。」

ハンコックはペイン（地獄道）に記憶はあるがそのことを口にできない術をかけられた。こうしてハンコックは暁海賊団のメンバーになった。このことは暁以外に知る人はいない。

そして島の者に悟られずその装置が完成した。

そして大蛇丸の任務は終了したのだった。

第六話

大蛇丸の任務（後書き）

次回はついにイタチ達の戦いです。

第七話

月詠……海軍大将クザン死す（前書き）

第七話です。クザンファンの方はすいません。ちなみに今更ですが
幻投身の術ですが投ではなく灯でした。すいませんでした。

第七話 月詠……海軍大将クザン死す

富、名声、力、この世の全てを手に入れた海賊王ゴールドロジャー！彼の死に際に放った一言が男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを進み続ける。

前回までのあらすじは

大蛇丸が暁にとって重要な役割の任務をアマゾン・リリーで成功し、王下七武海のハンコックを下部にした。そして今回はイタチ達の方に戻る。

あらすじ了

ここはアラバスタ王国の外。そこに海軍大将のクザンとイタチ。海軍大将のサカズキと鬼鮫が向き合っていた。だが、今回はイタチだけの戦いに着目しようと思う。

クザン「俺の相手はお前か。」

イタチ「そうです。そしてあなたはここで俺に負ける。」

クザン「ふん、いくら5億以上の賞金首だからって調子に乗っちゃダメだよ。」

イタチ「……………そうですか。」

イタチはそう言いながら一瞬でクザンの後ろに回り込み

イタチ「なら、俺を楽しませてくれ」

イタチは起爆札つきのクナイをクザンに突き刺そうとしたらクザンは軽々よけた。

クザン「ふー。危ない危ない。」

だがすぐに追撃がきた。さっきのクナイを投げてきた。だが、クザンは慌てずに

クザン「アイスタئمカプセル」

氷の弾丸を放ちクナイを凍らせた。

イタチ「爆！！！」

だが、起爆札が爆発し、クザンの周りにケムリが発生。

クザン「……………ちっこれが狙いか。」

イタチは鳥分身を4人作り計5人でケムリの外から

イタチ「火遁豪火球の術」

これでクザンをしとめたと思ったが、豪火球を丸々凍らされてしまった。

クザン「そんな攻撃じゃ俺は倒せない。」

イタチ「そうか。少々なめていたようだ。なら、こっからは少し本気を出すでしょう。」

イタチは写輪眼を発動した。

クザン「出たな。赤目と言われる代物が。だが、赤目になったからって何か変わるのかい？アイスサーベル」

クザンはアイスサーベルを発動し、イタチに突っ込んでいく。そしてイタチを横からぶったぎった。

クザン「うん？（何だこの手応えのない感じは）」

イタチ「アイスサーベル」

クザン「？何！！」

イタチはクザンの後ろに現れ、なぜかアイスサーベルを使ってクザンを貫こうとしたがクザンもアイスサーベルを使ってはじいた。

クザン「どういうことだ。貴様はそこで倒れていた筈だが………
…」

クザンは後ろを振り向いた。そこには倒れたイタチがいた。ちなみにクザンはイタチが鳥分身していた事には気づいていない。だが、

今回は鳥分身ではない。

クザン「……………いったいどういうトリックなんだ？俺のアイ
スサーベルは使っし……………」

イタチ「そんなに知りたいか？」

クザン「？何だと！！！！（このおれが気配に気付かなかった！！）」

クザンの後ろにもう一人のイタチが現れてクザンを逃げられないよ
うに捕まえた。

クザン「……………」

イタチ「お前の負けだ。残念だが我らの目的のために消えてもらっ
つ。

クザン「……………俺の負け？そんなわけがあるかよ。氷河時代！！」

クザンは砂漠とひつついているイタチ？」と凍らせた。

イタチ「……………これは!!」

イタチは自分の危機を感じてジャンプして回避。さらに豪火球で足元の氷を溶かして砂漠に着地した。

クザン「これを避けるとはね。」

イタチ「この程度どうてことはない。」

クザン「そうかよ。だが分かったこともある。」

イタチ「分かったこと?」

クザン「まずさっき俺にひっついていたのは幻だ。氷河時代で凍らせた時、俺の氷はそこには何もいないような感じで凍っていつていた。そこで幻と気づいた。恐らく、その赤目の能力は幻を作り出して相手を惑わせることが可能。さらに、相手の技をコピーできるといったところか。」

イタチ「ほう！これだけでそこまで気付くか。大したやつだ。だが、上には上がいるということを教えてやろう。万華鏡写輪眼！！」

イタチの目の模様が変わった。

クザン「？何だ！それは！！！」

イタチ「これは万華鏡写輪眼。写輪眼を超えた目だ。そして俺の目を見た。あなたはもう終わりだ。」

クザン「何！！ん？……………ここはどこだ？」

イタチ「ようこそ。ここは月詠の世界！そしてあなたはもうどこにも逃げることはできず、この俺に抗うこともできない。」

クザン「……………月詠だと!!!」

イタチ「月詠……………絶対に防御することのできない幻術！俺の瞳術の1つでもある。」

クザン「他にもあるのか……………」

イタチ「だが、あなたには関係ないことだ。この幻術世界に来てしまっただけのことでもない。」

クザン「? なっいつのまに!?!」

クザンは十字架に張り付けられていた。ちなみに能力を使おうと試みていたが、発動できないのに驚いていた。

クザン「……………海楼石か……………」

イタチ「それは海楼石ではない。言っただろう。ここは俺が作り出した世界！月詠の世界だと……………」

クザン「っち……………俺をどうする気だ。」

イタチ「もちろん死んでもらう。この世界でな。そしてお前は暁のために働く。」

クザン「……………そうかよ。」

イタチ「そしてあなたにはこれから地獄のような苦しみを味わってもらおう。」

クザン「?!?!?!?!」

ウワアアアアアアアアア

この叫び声を最後に海軍大将ヒエヒエの実の能力者青雉ことクザンは精神崩壊で精神が死んだために肉体も死亡。よってここにクザンの死亡が確認された。

ちなみにクザンの死体は暁海賊団の船に持っていかれることになる。

それとクザンがどういう幻術を見せられたのかは皆さんのご想像でお願いします。

イタチ「終わったか。……………鬼鮫の方はどうなったか……………」

鬼鮫「おや、イタチさんの方は終わったようですね。」

サカズキ「クザン！！おんどれ暁め。許さんぞー！！」

だがこちらの勝負はすぐに鬼鮫の勝利で終わった。鬼鮫は水遁を使い海兵を皆殺し。さらにサカズキは水をかぶり能力が使用できず、鮫肌でボロボロになり、倒れた。だが、意識は残っていた。

イタチ「やったか。」

鬼鮫「いえ、まだです。これからとどめをさそうかと………それより、クザンはどうするんです?」

イタチ「すでに能力は封印した。あいつは強い。だから持ち帰る。」

130

鬼鮫「そうですか。じゃあ赤犬さん!サヨウナラ。」

鬼鮫は鮫肌を振りおろしたが、サカズキがそこから消えたため驚いていた。

イタチ「……………バーソロミュー・くまか。」

だがくまはサカズキを背負うと瞬間移動で逃げた。

イタチ「逃げられたか。まあいい。クザンは回収した。鬼鮫！帰るぞ。」

鬼鮫「了解です。」

こうして海軍は大将一人が犠牲になるという痛手を負った。ちなみにアラバスタには海軍はもう一人も残っていない。暁によるダメージが大きく、撤退したのだった。

今回はここまでです。次回は海軍がどうなっているのかについてです。

第七話

月詠……海軍大将クザン死す（後書き）

おまけ

マダラ「ん？ヒエヒエの実の能力が封印された。どうやらクザンは死んだらしいな。それより大分能力が集まったな。もうじきだ。」

おまけ終了

第八話 悲しみ（前書き）

第八話です。今回は短いです。

あとがきにもありますが暁海賊団の船の名前を募集します。よろしくお願いします。

第八話 悲しみ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男、海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言が男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

イタチとクザンの戦いでクザンの死という形で戦いは終わり、鬼鮫は海軍大将赤犬ことサカズキにとどめをさそうかと思ったところ突如王下七武海のバーソロミュー・くまが現れ、瞬間移動でサカズキを連れて海軍本部へと逃げていった。

あらすじ了

海軍本部

くま「つれてきた。」

センゴク「ご苦労だったくまよ。」

そこにはボロボロになった赤犬が気絶していた。

センゴク「……………その海兵！」

海兵「はい！」

センゴク「すぐにサカズキをボルサリーノと同じ治療室に」

海兵「わかりました。」

そう。ボルサリーノは大蛇丸の攻撃を少し食らっていたのだった。

センゴク「……………何となくわかるがクザンはどうした？」

くま「……………死んだ。そして、暁に死体を持っていかれた。」

センゴク「……………そうか。……………（クザンよ……………すまなかった。わしとしたことが暁のスパイにも気付かず、みすみす取り逃がしてしまった。ワシはこの職を退職したらお前に元帥の座を渡そうかと思っていたのだがな）……………クザンよ……………本当はすまない。……………」

くま「……………」

センゴクはこの日は泣いていた。

ところで何故くまがアラバスタにまた現れたのか。ちょっと振り返ってみよう。

くま達が 大蛇丸の攻撃で死にかけた時、特大圧力砲でほんの少しだけ時間を稼ぎ、ボルサリーノとくまはダメージをくらいながらもくまの能力で海軍本部へ帰還した。

そしてボルサリーノとくまはセンゴク元帥の部屋にボロボロになりながらもやってきた。

センゴク「？ なっボルサリーノ！ お前は大丈夫か。それとくま！ お前たちがそんなにボロボロになるなど何があった？」

ボルサリーノ「それがね〜。途中まではよかったのよ〜！ でも突然別の暁が現れてね〜不意打ちをくらったんだけどね〜。」

センゴク「別の暁……………特徴は？」

くま「へびだった。あれは恐らく大蛇丸だろう。だがそうになると赤犬達が危ない。」

ボルサリーノ「うーん。確かにいくら赤犬達でも暁のメンバー三人

と戦うのは厳しいかもね」

センゴク「……………無事だといいがな！」

ボルサリーノ「しかし、クロコダイルを狙うのに暁も大分戦力を持つてきたもんだね」

センゴク「いやったしかに暁はクロコダイルを狙ってはいるが今回来ているのは恐らく2割程度の戦力だ。暁には得体の知れないやつが多い。特にこの船長。輪廻の長門率いるペインどもがな。」

くま「……………」

センゴク「それよりボルサリーノ」

ボルサリーノ「何ですか？」

センゴク「お前は治療室で休め。」

ボルサリーノ「了解。」

そしてボルサリーノは退出した。

その時

海兵「失礼します。」

センゴク「どうした？」

海兵「大変です。アラバスタに到着した海兵からの連絡で海軍の中に暁のスパイが紛れこんでいたもようです。」

センゴク「？何じゃとー！！！！で今どうなっている。」

海兵「ただいまサカズキ大将とクザン大将がスパイだった暁海賊団のイタチと鬼鯨と交戦中です。」

センゴク「そうか。」

海兵「失礼します。」

センゴク「何だ？」

海兵「暁海賊団のデイダラとサソリがアラバスタに到着。それと大蛇丸の行方が分かりません。」

センゴク「……………これは非常にまずい。ぐっ……………」

海兵「失礼します。元帥宛てにデーンデーン虫が」

センゴク「うん?」

デندن虫「センゴク元帥大変です。サカズキ大将とクザン大将が
圧されています。ウワアアアアアアア……………何だあい
つは……………サカズキ大将が能力を使えなくなったぞ……………ギヤアアア
……………クザン大将が倒れた……………」

センゴクはそこでデندن虫をきった。

センゴク「これは予想外だ。くまよ。すぐにサカズキとクザンの元
に行き、連れて戻ってこい。」

くま「……………わかった。」

そういうことがあったのだった。

そして翌日、海軍本部にクザンの墓と共に死んでいった海兵達の墓
ができて海軍全員で黙祷した。

みんなそれぞれの悲しみをもって。

今回は短いがここまでにしよう。皆さん海軍大将クザンに黙禱を…

………

第八話 悲しみ（後書き）

暁海賊団の船の名を募集します。

その中から一つだけ採用します。

どうか皆さんよろしくお願いします。

第九話　クロコダイル……第一章砂漠のクロコダイル編終了（前書き）

第九話です。そして第一章砂漠のクロコダイル編が終了します。

第九話

クロコダイル……第一章砂漠のクロコダイル編終了

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言が男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

海軍に赤犬を連れ帰ってその後くま達の大蛇丸にやられた回想シーンにはいった。そして海軍全員でクザン達を黙祷した。

あらすじ了

アラバスタ

一方デイダラのC2に乗ってアラバスタにやってきたデイダラとサソリはクロコダイルを探していた。

デイダラ「まったく、クロコダイルのやつはどこにいやがるんだ。うん！」

サソリ「黙って探せ。」

デイダラ「でもよお、この戦争の中からクロコダイルのやつを見つけるのって大変すぎるだろ！うん。」

とその時、突如宮殿の周りに砂嵐がおきた。

デイダラ「うん？おっ！あいつは……………おい旦那。クロコダイルのやつを発見した。」

サソリ「わざわざ自分の居場所を知らせてくれるとはな。」

そしてデイダラ達はクロコダイルがいる宮殿に向かっていた。

一方クロコダイルは

クロコダイルは今国王にポーネグリフの場所を聞いていた。

クロコダイル「いいか？言うことをきかなければこの娘がどうなっても知らんぞ！」

国王「……………わかった。着いてきなさい。」

クロコダイルが国王について行くときに

デイダラ「いったい、どこにいこうってんだ？うん。」

サソリ「わざわざ自分の居場所を知らせてくれるとは、探す手間が省けた。」

クロコダイル「っち……………暁か。一人はデイダラ……………もう一人は誰だ？」

今サソリはヒルコを脱いでいる状態なのでクロコダイルはサソリだとは気づかない。

クロコダイル「っち、もうアラバスタにきていたとはな！」

デイダラ「じゃあちゃっちやとクロコダイルをやりますか！うん。」

サソリ「ついでにこいつの死体は持ち帰るか。」

クロコダイル「……………ハハハハハハハハハ！」

デイダラ「何がおかしい。」

ククロコダイル「俺がお前達の対策を考えていないとでも思ったのか？」

サソリ「対策？」

ククロコダイル「そうだ。この砂嵐はお前達をおとしめるための物だ。フン」

ククロコダイルが両手をクロスさせると砂嵐がデイダラ達の360度全方向からライオンの姿でつぶした。

ククロコダイル「フン！あっけないな。お前達の行動は常に監視していた。この計画は暁という邪魔がいなければ必ず成功する。」

サソリ「……………対策というのはこれだけなのか？」

クロコダイル「？何だと！あれをくらって無傷だと！！！」

クロコダイルが放ったのは普通なら水分も吸い取られて圧力で体がバラバラになる技だった。

しかしサソリとデイダラは無傷だった。

クロコダイル「いったいどういうことだ。」

サソリ「簡単だ！お前が砂を使うように俺は砂鉄を使う。」

サソリは砂鉄を展開して砂を防いでいた。ちなみにこの砂はクロコダイルの体じゃないので毒は入り込まない。

サソリ「面倒だ。終わらせる。」

サソリは三代目風影を出した。そして口から砂鉄を出して

サソリ「砂鉄界法！！！」

クロコダイル「何！！グワァ」

砂鉄は見事クロコダイルを貫いた。

サソリ「これで終わりだ。」

だがその時

???「ウオオオ！クロコダイルをぶっ飛ばすのは俺だあああ！」

サソリ「何！」

デイダラ「旦那！」

サソリは殴られて吹っ飛んだ。
そして壁に激突した。

デイダラ「あいつは……………麦わら海賊団の船長。モンキー・D・
ルフィか。……………くそっこれじゃあ手が出せねーぜ。」

サソリ「……………くそっ不覚だった。俺の砂鉄もガードできなかった。」

ちなみにルフィは砂鉄にふれていません。砂鉄が展開する前に殴った。普通なら展開して守れるはずだが相手が不意をついたせいでサソリと砂鉄は反応できなかった。

ルフィ「おいお前！」

サソリ「……………何だ？」

ルフィ「クロコダイルは俺がやる。邪魔をするな！」

サソリ「（つち面倒くせー。こいつがあいつの息子じゃなかったら間違いなく殺してる。）……………好きにしる。だがそいつはすでに俺の毒をくらっている。もう長くない。やるなら早くやるんだな！」

クロコダイル「……………くっ……………麦わらめ……………生きてたか」

ルフィ「お前感謝する。クロコダイル！俺はお前をぶっ飛ばす。」

クロコダイル「……………くっ能力が使えない！！！！」

ルフィ「ウオオオ！ゴムゴムのバズーカ！」

ルフィはクロコダイルが技を出さないと知るとクロコダイルをゴムのバズーカで飛ばした。

クロコダイル「グオツ……………（やつの攻撃が当たっただと！）」

サソリ「クロコダイルめ。驚いてやがるな。俺の毒はただの毒じゃない。能力者の能力を無効にする働きがある。これで終わりだな！」

案の定クロコダイルはルフィにぶっ飛ばされ、ルフィは勝った。

デイダラ「やれやれ、何はともあれクロコダイルは殺った。旦那帰ろう。」

サソリ「ああ。」

こうしてクロコダイルは暁に、正確にいうとルフィに敗れ、満足したルフィは宮殿に、暁は結局毒で死んだクロコダイルを持ち帰った。

第一章 砂漠のクロコダイル終了

ちなみにまだ二章には入りません。

第九話 クロコダイル……第一章砂漠のクロコダイル編終了（後書き）

第一章が終了しました。

二章に入る前に番外編でサスケがポケットモンスターの世界に行く話を書きます。ご了承ください。

番外編 1 第十話 　　うちはサスケポケモン世界へ (前書き)

番外編です。二章に入るまで番外編をやります。

番外編 1

第十話

うちはサスケポケモン世界へ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

とある日のこと

暁海賊団の船長長門からとある任務を言い渡されたうちはサスケ！
今は冬島に来ていた。

サスケ「ここが冬島！目的の物は近いな。」

ちなみに香燐や重吾、水月は今回ついてきていない。
今回のサスケの任務はある素材の回収だった。

サスケ「しかし、どこにあるんだ。」

サスケがとある物を探して数時間後に断崖絶壁の崖の途中にキラキラ光る丸い水晶みたいのが挟まっていた。

サスケ「あれか！」

サスケは崖を登ってその水晶みたいなのに触ろうとした。だがその水晶から強烈な光が放たれてサスケは気絶した。

イツシュ地方 タワーオブヘブンの最上階

そこに一人の男が倒れていた。そう、暁海賊団のうちにはサスケである。

何と彼はポケモン世界に来ていた。

サスケ「……………う……………う……………ここは……………」

サスケは目を覚ました。

サスケ「……………確か俺は冬島にいたはずじゃ……………？あの水晶は……………！！！」

サスケの目の前には輝きを失った水晶があった。

サスケ「………つち……………この水晶に時空間忍術が仕込んであったか……………つまりここはグランドラインのどっかか、異世界というところか……………元の場所に戻るにはこいつを使うしかないようだな。だが今は力がない。この世界を見ながら力が戻るのを待つしかないか……………」

サスケはふとでかい鐘を見た。

サスケ「……………鐘……………ならしてみるか……………」

カラン

カラン

カラン

カラン

???「いい音色。だけど孤独を感じるようなそんな音色。」

サスケ「誰だ！そこにいるのは最初からわかっている。」

???「あらあくバレちゃったか！気配が鋭いんだね！」

サスケ「テメエー何もんだ？」

フウロ「私？私はフキヨセシティのジムリーダーのフウロ！よろしくね」

サスケ「フキヨセ……………やはり！（やはり）は
異世界か。」

フウロ「君は？」

サスケ「うちは。うちはサスケだ！」

フウロ「サスケ君ね！それよりも私ビックリしちゃったよ。突然光と共に現れるし」

サスケ「……………そうか……………なら失礼した。」

フウロ「ちよつとどこ行くの？」

サスケ「とりあえずここを降りて俺は世界を見て回る。」

フウロ「でもあなたここの世界の人じゃないんでしょ？場所とか分かるの？」

サスケ「？なぜ俺がこの世界の住人じゃないと分かった！！！！！」

フウロ「だって自分で言ってたじゃない！それにその水晶のことは分からないけどあの人なら何か知っているかも！」

サスケ「あの人？」

フウロ「うん。シンオウ地方に住んでる人何だけどね！」

サスケ「そうか。助かった。じゃあな。」

フウロ「ちょっと！場所分かるの？」

サスケ「……………」

フウロ「それにポケモン持っていないなら旅はオススメしないわ！」

サスケ「ポケモン？何だそれは……………」

フウロ「あら、本当に知らないのね！これがポケモンよ。来て……
スワンナ」

モンスターボールからはくちょうみtainなポケモンが現れた。

フウロ「この世界には野生のポケモンがたくさんいるの！それもおとなしいのから荒いのまでたくさん！ポケモンはね！私たちのパートナーなの！」

サスケ「……………一種の口寄せ獣か！それなら問題ない！俺は強いからな……………」

フウロ「……………分かった。私もついていく。」

サスケ「なぜだ？」

フウロ「なぜって……サスケ君場所分らないし、何よりポケモン持っていないから心配なの！」

サスケ「フン、余計なお世話だ。好きにしろ……だが俺の足手まといにはなるなよ！」

フウロ「ありがとう。じゃあちょっとジムの方に連絡するね！」

それからしばらくして

サスケ「じゃあ行くぞ。」

サスケ達はタワーオブブンを降りて旅に出た。続く

番外編 1 第十話 　　うちはサスケポケモン世界へ 　　（後書き）

暁海賊団の船の名を募集してます。リクエストがあればどんどん言
ってください！

番外編 1 第十一話 プラズマ団 (前書き)

まだまだ番外編です。ちなみに暁海賊団の船の名前を募集中です。そちらの方もお願いします。

番外編1 第十一話 プラズマ団

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

冬島へとある物質を回収しにきたうちはサスケ。だがそれには時空間忍術がしかけており、ポケモンの世界へとばされてしまった。そしてフウロと出会い、とりあえずはシンオウ地方へ向かうことを目標にした。今ここからサスケの旅が始まる。

あらすじ了

イツシュ地方 電気石の洞穴

サスケとフウロは電気石の洞穴の中に来ていた。野生のポケモンが襲ってきたりしたがフウロのポケモンが倒していった。

サスケ「それにしても広いな！」

フウロ「まあ洞穴だしね。」

サスケ達は洞穴内をどんどん進んでいく。その間はフウロがサスケがいた世界のことを聞いていた。

フウロ「サスケがいた世界ってどういうところなの？」

サスケ「俺がいた世界はまあ激しいところだ。」

フウロ「激しい？」

サスケ「ああ。俺がいた世界では海賊がいてな、ワンピースというひとつなぎの秘宝を求めて海へ出ていた。そこから大海賊時代の到来だ。」

フウロ「海賊？海賊ってやっぱり犯罪者みたいなものなの？」

サスケ「……………ああ。だから海軍がいる。海賊を捕まえて公開処刑かインペルダウンに収容されるからだ。」

フウロ「ふーん。ちなみにサスケは？」

サスケ「……………海賊だ！俺は暁海賊団のメンバーだ。」

フウロ「？……………なんかごめん。」

サスケ「いいさ。ちなみに俺につけられた懸賞金は7億2000万ベリーだ！」

サスケ「いいから隠れてろ。」

フウロ「わ……………分かった。」

フウロは隠れた。

サスケ「……………おい、そこでコソコソやっているやつら出てこい。」

プラズマ団「っち……………ばれたか！」

洞穴の奥からプラズマ団が30人ぐらい出てきた。

フウロ「(プラズマ団)……………」

サスケ「お前達ずっと俺達を監視していただろ！返答しだいじゃ命の保証はない。」

プラズマ団「気付かれていますしょうがない！ゲーチス様の命令により貴様を排除する。いけっレパルダス」

プラズマ団はそれぞれのポケモンを出した。フウロはこれを見て黙っていられる筈もなく

フウロ「サスケ……！」

サスケ「心配無用だ。最近回収任務ばかりで退屈してたところだ。黙って見ている。」

プラズマ団「くらえ。あくのはどう」

プラズマ団はそれぞれのポケモンにあくのはどうやはかいこうせんかえんほつしゃやサイケこうせんなどたくさん技を放ってきた。サスケはこれに臆することなく素早く印を結ぶと

サスケ「火遁豪火球の術」

それらの技をすべて豪火球で打ち消した。だが豪火球の勢いは止まらず、洞穴内を少々破壊しながらプラズマ団員の半分巻き込んだ。当然巻き込まれた団員は虫の息だった。

プラズマ団「おい、何だよこいつは聞いてねーぞ！」

サスケ「そんなのが攻撃か？本当の口寄せ獣の攻撃を見せてやる。」

ちなみにサスケは蛇と鷹を口寄せできる。

サスケ「口寄せの術！」

ポン

ケムリから出てきた口寄せ獣にフウロもプラズマ団も驚いた。
なぜなら全長10メートルは超える蛇だからだ！

プラズマ団「なんだこのポケモンは！」

フウロ「(出かい。)」

サスケ「やれ！」

サスケの合図と共に口から大量の蛇を出して津波のようにプラズマ団を襲った。

プラズマ団「逃げるー！」

プラズマ団は全員逃げていった。
サスケはいなくなったことを確認すると蛇を帰した。
そしてサスケは重要なことに気付いた。

サスケ「そういえば何故異世界で口寄せ出来たんだ？」

フウロ「お疲れ様。サスケってやっぱり強いんだね。サスケ？」

サスケ「（口寄せ獣は出せる。確かに口寄せの術は時空間忍術の1つ。ならば逆口寄せなら元の世界に戻れる？）……………」

フウロ「サスケ？どうしたの？真剣な顔をして」

サスケ「……………いや、何でもない。先へ進むぞ！」

フウロ「？分かった。」

サスケ「（とりあえず口寄せなら元の世界に戻れる。今度試してみるか！）」

サスケとフウロの旅はまだまだ続く。

番外編 1 第十一話 プラズマ団 (後書き)

おまけ

ポケモンセンター内で

サスケ「行くぞ。」

フウロ「もう行くの?」

サスケ「ああ。」

サスケは進む

フウロ「でもそっちは行き止まりよ。」

サスケ「……………」

フウロ「ふふっかわいい!」

サスケ「…つるさい。先に行くぞ。／＼／」

おまけ終了

番外編 1 第十二話 ホドモエシティ（前書き）

まだまだ番外編です。

番外編1 第十二話 ホドモエシテイ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

サスケとフウロの前に現れたプラズマ団！サスケ曰わくずっと後をつけていたらしい。そしてプラズマ団が襲いかかるもサスケは軽く追い払った。

あらすじ了

ホドモエシテイ

サスケ達は電気石の洞穴を抜けてずっと進み、ホドモエシティにや
つてきた。

サスケ「ここがホドモエシティか！」

フウロ「ええ。ここにはジムリーダーのヤーコンさんがいるの。」

サスケ「なかなかいいところだな」

フウロ「そうですね。あっそうだ！」

サスケ「何だ？」

フウロ「ヤーコンさんに会いに行かないと。」

サスケ「何かあるのか？」

フウロ「ここからライモンシティに向かう途中にホドモエ大橋があるんだけど今プラズマ団がいることで橋を上げているの。だから橋をおろさないと渡れないっていうわけ。」

サスケ「プラズマ団……昨日の連中か！」

ちなみに電気石の洞穴から1日たっています。ちなみにテントを張ったその夜に（フウロがフキヨセシティから電気石の洞穴に行く前にいろいろな生活に必要な物を持ってきている）サスケは逆口寄せを試したが無理だった。ということだけ言っておきます。

フウロ「じゃあ行こう。」

サスケ達はヤーコンがいるジムに向かった。するとジムの前にプラズマ団がいるのが見えた。

サスケ「っちプラズマ団め！」

フウロ「早く行きましょう。」

ホドモエジムの前

ゲーチス「フフフっさすがこのジムリーダー。話ができることで」

ヤーコン「……………」

サスケ「まで！」

ゲーチス「おや？君はたしか……………空間を司るポケモン。パルキアがもつといわれるあの水晶を持つ方じゃありませんか。」

サスケ「空間を司るポケモンパルキアだと？何だそいつは？」

ゲーチス「おやおや知らなかったのですか！あなたが持っているのはしらたまといつてですね、空間を司るポケモンパルキアが持つと言われているのですよ。ちなみにパルキアはシンオウ地方にいとされています。パルキアは空間を自在に操ることができる神のポケモンです。私たちがここにいても全てパルキアのおかげということですよ。」

サスケ「神……………（ペインの持つ輪廻眼の能力。あれも神の能力だが、空間の神ポケモンか……………俺の口寄せ獣にピツタリだな）！」

ゲーチス「おやおや、神のポケモンと聞いて驚かれましたか！やはり最初は誰でも驚くものです。」

サスケ「フフフっ！神のポケモンか……………おもしろい。」

フウロ「……………サスケ……………」

ゲーチス「でもあなたには関係ないことです。あなたは少々特殊な技を使うらしいですが、関係ありません。あなたはここでお別れで

す。」

ヤーコン「おい、約束が違うぞ。」

ゲーチス「約束？何のことです？」

ヤーコン「貴様！！！」

サスケ「おい、貴様の名は？」

ゲーチス「うん？私ですか？人に名を名の前に自分の名は言わないんですか？一種の礼儀ですよ。」

サスケ「……………俺の名はうちはサスケ。暁のメンバーだ！懸賞金7億2000万で迅雷と呼ばれている。そして貴様はここで死ぬ！」

ゲーチス「……………懸賞金7億2000万の犯罪者というわけですか。ちなみに私の名前はゲーチスです。」

ゲーチスがボールを構える。それにつられてヤーコンとフウロもボールを出そうとするが

サスケ「俺1人でやる。お前達は黙って見てろ。」

ヤーコン「……………」

フウロ「殺しちゃダメだよ！」

サスケ「俺は殺すつもりでやる。それで死んだらあいつが弱かったというだけだ。」

フウロ「……………」

ゲーチス「フフフ！私を殺す？出来るのですか？あなたに！」

サスケ「ああ簡単にな。」

ゲーチス「そうですか。お前達やってあげなさい。」

ブシュ

ゲーチス「?!?!?!」

サスケは高速で移動して刀でプラズマ団全員（ゲーチス以外）を切り捨てた。

ヤーコン「なっ!!（なんだこの小僧！本当に人間か？）」

フウロ「（……………サスケってこんなに強いんだ！それに躊躇することなく人を斬った。プラズマ団は生きてはいるけど全員傷が深く気絶している。それに見えなかった。速すぎる。これが海賊…

……」

ゲーチス「なっ………一体何が」

サスケ「どうした！怖じ気づいたか？まだ本気の一割も出してないぞ。」

ゲーチス「くっ………こんなところで死ぬわけには行かない。」

ゲーチスはサザンドラとキリキザンとその他のポケモンを出した。そして全員に最大級のわざを出させた。

デュゴーン

フウロ「サスケ………！」

ヤーコン「……可哀想に」

ゲーチス「ハハハハハハハハハハハハ！」

フウロは叫んだ。果たしてサスケは生きているのか？
続く。

番外編 1 第十三話 ゲーチス（前書き）

まだまだ番外編です。今回は少し短いです。

番外編 1 第十三話 ゲーチス

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

ホドモエシティについたサスケ達はライモンシティに進むためジムリーダーのヤーコンに会いに行くことになった。そこでプラズマ団と再開。サスケは一瞬で団員を倒すがゲーチスは無駄な抵抗で持っているポケモン達を使ってそれぞれの特技をださせた。

あらすじ了

ホドモエシティジム前

ゲーチス「?!何だそれは」

フウロ「!!!!何これ!!!!」

ヤーコン「……………これは!!!!」

全員驚いていた。それもその筈、サスケからなんかオーラみたいな物が出ていて剣と盾を持っているからだ。

サスケ「これか?これはスサノウ!うちの者でも数名しか開眼しない瞳術写輪眼。そして開眼するのはほんの僅かしかない万華鏡写輪眼。スサノウは両目が万華鏡写輪眼になった時に発動できる俺のとおきだ。」

ゲーチス「……………くっ!!!!お前達もう一度だ。」

ゲーチスはポケモン達に最大級の技を出すように命令した。だがポケモン達も恐怖で動けないらしい。

サスケ「終わりだ。死ね！」

スサノウが剣を振り下ろす。ゲーチスに向かって、ゲーチスとポケモン達はあまりの恐怖に気絶した。だが剣は止まらない。その時

サスケ「？」

スサノウが止まった。

サスケ「何の真似だ。」

スサノウの剣が振りおろされる位置にフウロが立っていたのだ。

フウロ「殺しはダメだよ！……………サスケ……………」

サスケ「……………ちっ分かった！」

サスケは万華鏡写輪眼を解いた。するとスサノウも消えた。

サスケは万華鏡写輪眼を使ったため、少し疲れた！

フウロ「ふーっありがとうサスケ。」

サスケ「ふん、勘違いするな！あいつが気絶したから興味が失せただけだ。」

フウロ「素直じゃないな〜もう。」

その後、ゲーチスとプラズマ団は逮捕された。

そして今日はもう遅いのでポケモンセンターに泊まることになった。

ヤーコンにはライモンシティに行きたいと告げると明日橋をおろしてくれるそうだ。

そしてサスケは考えていた。

風呂で

サスケ「（なぜ俺はあの時スサノウを止めたんだ。あの女が現れるまでは……………あの女が現れたらなぜか殺すのをためらった。一体なぜだ？共に旅をする仲間だからか？……………」

サスケは自分の心に問いかけていた。

これから先もこんなことがあるのか……………とこの夜悩み続けていた。

一方フウロも先のことと考えていた。

フウロ「（あの時、確かにサスケは殺す気でやってた。私が入らなかつたら確実にあの人は死んでいた。一体どうやったたらあんなにまで……………彼のいた世界が激しかったのか、それとも彼の過去が騒々しいものだったのか何なのか気になるな）」

フウロはサスケのいた世界のことを気にかけていた。
そしてこの夜は過ぎていき朝に朝食を食べてとりあえずライモンシ
ティを目指して出発したのだった。続く。

番外編 1 第十三話 ゲーチス（後書き）

皆さんご視聴ありがとうございます。

それと番外編1が終了したら第二章は空島編に入ります。第二章終了後に番外編2をいれますので、次の中からサスケとコラボさせたいのを選んでください。

・BLEACH

・FAIRY TAIL

・ゼロの使い魔

・TOLover

・デジモン（アドベンチャーからセイバースまでのどれか）

この中から一つお願いします。ちなみに番外編ですので長くはならないです。

ご了承ください。

番外編 1 第十四話 ライモンシティ（前書き）

まだまだ番外編です。

第二章の後に予定してる番外編2をうちはサスケとのコラボでどれがいいか次の中から一つ選んでください。

・ブリーチ

・フェアリーテイル

・ゼロの使い魔

・TOLover

・デジモン（アドベンチャーからセイバースまでのどれか）

番外編なので短いですがお願いします。一番多かった順にコラボしていきます。

番外編1 第十四話 ライモンシティ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

ゲーチスをプラズマ団もろとも殺そうとしたサスケだがフウロが割り込んだため殺すことができなかった。そしてサスケとフウロの心境が少し変わってきていたのだった。

あらすじ了

ライモンシティ

サスケとフウロはホドモエシティでいろいろあったが橋も渡り、ライモンシティに到着したのだった。

サスケ「ここがライモンシティ。」

フウロ「私達が目指すのは船が出るヒウンシティ！そこからシンオウ地方行きの船に乗る。もうちょっとよ。」

サスケ「……………もうじきか……………」

フウロ「それとヒウンシティに行く途中に古代の城があるんだけど寄ってみる？」

サスケ「俺は一刻も早くシンオウに行きたい。寄り道はしない。」

フウロ「分かったわ！まあとりあえずライモンシティにはジムリィーダーで友だちのカミツレがいるの。会いに行きましょう。」

サスケ「またジムリーダーか。フンまあいいだろう。」

サスケ達はジムに向かったがカミツレは今留守みたいだった。

サスケ「残念だったな！」

フウロ「何かの用事かしら？あつそうだ。ライモンシティには観覧車があるの。サスケ！乗りましょう。」

サスケ「観覧車？何だそれは……………」

フウロ「あそこに見える物よ！」

サスケ「あれが観覧車。見る限りクルクル回ってるだけだが？」

フウロ「でもあれに乗ればヒウンシティは見えるわよ！場所を確認するだけでもいいじゃない？」

サスケ「……確かにな！じゃあ乗るか。」

そしてサスケとフウロは観覧車へ向かった。

そして観覧車に乗ろうとしたらフウロは声をかけられた。

「??？」あら、フウロじゃない。どうしたの？こんなところまで？」

サスケ「誰だ？この女は」

フウロ「カミツレ！サスケ。この人がカミツレだよ。」

カミツレ「サスケ君？初めまして。ライモンシティジムリーダーのカミツレです。」

サスケ「うちはサスケだ。」

「
フウロ「それよりどこに行ってたの？ジムに行ったらいなかったし。」

カミツレ「ああ！ちょっとポケモンセンターにね。」

フウロ「ポケモンセンター？誰かジムに挑戦したの？」

カミツレ「ええ。かなり強かったわ！コテンパンにされたもの。」

フウロ「ふーん。カミツレがコテンパンにねえ。私も戦って見たかったな〜！」

カミツレ「あら？何か用事でも？」

カミツレはフウロとサスケを交互に見る。そしてカミツレは理解した。

カミツレ「なるほどね。」

フウロ「え？何が？」

サスケ「……………」

カミツレ「何でもないわ！それよりもこれから何か？」

フウロ「うん、私達シンオウ地方に行く途中で明日にはヒウンシティに向かうんだけどその前にサスケに観覧車に乗ってヒウンシティがどこにあるのかを見せるところだったの！」

カミツレ「ふーん！（ってただフウロが観覧車に乗りたいだけじゃない）」

サスケ「おい、フウロ。いつまで話をしている。早くこれに乗るぞ。」

フウロ「あ……サスケごめん！じゃあカミツレまたね！」

カミツレ「いえ、私も乗るわ！」

フウロ「ええ！……！」

サスケ「乗るならさっさとしろ。」

カミツレ「ええ。」

フウロ「………もう！」

サスケ達は観覧車に乗った。

観覧車内

フウロ「あれがヒウンシティよ！」

サスケ「近いな！」

カミツレ「ちなみに2人はシンオウ地方に何しに？見る限りサスケ君はトレーナーじゃなさそうだし。」

サスケ「……………これだ。」

サスケはしらたまを見せた。

カミツレ「これは？」

フウロ「それはシンオウ地方にいるといわれてる空間ポケモンパルキアが持っている物らしいの！」

カミツレ「どうしてこれをサスケ君が？」

フウロとサスケはうなづいた。

サスケ「いいだろう。カミツレ！他言は禁止だ。」

カミツレ「ええ。分かったわ！」

それからサスケは自分がこの世界の住人ではない異世界人であること。さらにこれを見つけるまでの経緯、自分がどういった人間なのか。シンオウに行く理由などを話した。

カミツレ「……………なるほどね。だからシンオウに！」

サスケ「ああ。」

カミツレ「それだったら私も旅に同行しようかな!」

フウロ「え?」

サスケ「……………」

カミツレ「別にいいでしょ?」

サスケ「好きにしろ。」

カミツレ「ありがとう。」

そしてカミツレも旅に同行することになった。続く。

番外編 1 第十五話 ヒウンシティ（前書き）

番外編です。もうすぐで終了です。

番外編 1 第十五話 ヒウンシティ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

ライモンシティでカミツレと会い観覧車に乗る。観覧車内でカミツレにサスケ自身のこと、今後のことを話した。そして話を聞いたカミツレはサスケ達と共に旅に出ると決め、共に行くことになった。あらすじ了

ヒウンシティ

サスケとフウロに加え、新たに仲間になったライモンシティジムリーダーのカミツレ！一行はライモンシティを出て砂漠を抜けてヒウンシティについたところだった。

サスケ「ようやくヒウンシティについたか。船乗り場に向かうぞ。」

そしてサスケ達は船乗り場についた。

カミツレ「私達はキツサキシティ行きの船に乗るわよ！」

フウロ「キツサキシティ？あつ………そういつことか！」

サスケ「どういつことだ？」

カミツレ「キツサキシティにはキツサキ神殿とというのがあるのよ。だから何かわかるかなあと。」

サスケ「なるほど……ならキツサキシティ行きの船を探るか。」

サスケ達一行はキツサキシティ行きの船を見つけたが出航が明日だったため今日はヒウンシティに泊まることになった。

フウロ「そういえばここってアーティさんがいたよね?。」

カミツレ「ええ。」

サスケ「アーティ?おそらくジムリーダーか?。」

フウロ「ん?何で分かったの?。」

サスケ「お前が街についた時に口にするのは大抵ジムリーダーだからだ。」

カミツレ「あらっそうなの?。」

サスケ「ああ。」

フウロ「ありやりやあ／＼」

サスケ「っで会いに行くのか？」

フウロ「会いに行ってもいいけど特に話すことないしいいかな？っ
て思ってたんだけど会いに行く？」

サスケ「ならいい。」

カミツレ「それでこれからどうするっ？」

フウロ「うーん！」

サスケ「そういえばこの世界にはポケモンバトルというのがあるんだろ？見せてくれないか？」

カミツレ「そうね。確かにジムリーダーとなつてからフウロとポケモンバトルしてないし、いい機会だからしましょうか。」

フウロ「うん！確かにサスケはトレーナー同士のポケモンバトルつて見たことなかったかも。いい機会だし。勝負しましょう！」

そしてサスケ達はポケモンセンターの裏にあるバトルフィールドにやってきた。

カミツレ「使用ポケモンは一体よ！ルールは先に戦闘不能になつたら負け。それでいいよね。」

フウロ「ええ。相性が悪いけど負けないわよ。」

カミツレ「私も負けるつもりはない。」

カミツレ vs フウロ

カミツレはゼブライカをくりだした。

フウロはスワンナをくりだした。

カミツレ「先行はもらった。ゼブライカ10万ボルト！」

フウロ「スワンナよけてハイドロポンプ！」

スワンナはゼブライカの10万ボルトをよけてハイドロポンプを出した。

カミツレ「ゼブライカ！スパークでハイドロポンプを打ち消してほ
うでん！」

フウロ「スワンナよけて！」

だがゼブライカはスパークで打ち消してほうでんでスワンナにあてた。

フウロ「スワンナ！まだ行ける？」

スワンナはうなづいた。

カミツレ「へーやるわねあなたのスワンナ！私の電気に耐えるなんて。」

フウロ「勝負はまだまだこれからよ。」

そしてスワンナとゼブライカの戦いは30分くらい続いた。お互いの体力はあと少し！

次の一撃で決着をつけるところだった。

カミツレ「次の一撃で最後にするわ！」

フウロ「ええ！」

カミツレ「ゼブライカ！かみなりよ。」

フウロ「スワンナ。最大出力でハイドロポンプ。」

そしてお互いの技がぶつかり爆発が起きた。

さらにケムリでポケモンの姿が見えない。フウロとカミツレは息をのんだ。

この戦いを見ていたサスケも息をのんだ。

そしてしばらくしてケムリが晴れてそこに立っていたのは……………
……………スワンナだった。

フウロ「ヤッターアアアアアアア！勝ったああ！スワンナやったよ
！」

カミツレ「あらら、負けちゃった。でも久々にワクワクしたわ！」

フウロ「カミツレ！いいバトルだったよ。ありがとう。」

サスケ「おつかね。2人とも！」

フウロ「いやあーこんなに熱くなると思わなかったよ。」

カミツレ「私も！今日は疲れたわ。明日は早いしもつゆっくりしま
しょう。」

サスケ「ああ。」

こうしてイッシュ地方最後の夜をポケモンセンターで過ごした。
次回はいよいよシンオウ地方！お楽しみに！続く。

番外編 1 第十五話 ヒウンシティ（後書き）

もうじき番外編が終了いたします。

番外編 1 第十六話 キツサキシティ（前書き）

番外編です。もうじき終わります。
そしてシンオウ地方に到着。

番外編1 第十六話 キッサキシティ

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

ヒウンシテイについたサスケとフウロとカミツレ！キッサキシティ行きの船を探すも出航は翌日だった。そしてその日はすることがなくフウロとカミツレがポケモン勝負をして、死闘のすえ、フウロが勝った。そして今日も旅が続く。

あらすじ了

キッサキシティ行きの船の中

サスケとフウロとカミツレはヒウンシティ朝一のキツサキシティ行き
の船に乗り、イツシュ地方の地を離れた。

サスケ「もうじきシンオウ地方か。待っている。」

フウロ「サスケ。もっと肩の力を抜いたら？」

カミツレ「そうよ。シンオウにはまだ数時間はかかるわよ！」

サスケ「ああ。」

船の中は特にやることなく暇だった。

そして数時間が経過してそろそろキツサキシティにつくところだった。

アナウンス「そろそろキツサキシティに到着します。荷物をお忘れずに降りる準備をしてください。」

サスケ「そろそろか。」

フウロ「たしかに寒くなってきたわね。」

カミツレ「まあ北の大地だしね。キツサキシティは雪が降ってるからもっと寒いよ。」

そして船はキツサキシティに到着しました。
サスケとフウロとカミツレはとりあえずポケモンセンターに向かった。

サスケ「……………」

フウロ「！寒い！何なのこの寒さ！」

カミツレ「まあたしかに寒いわね。」

サスケ「あそこにポケモンセンターがある。とりあえずあそこに行くぞ。」

フウロ「ふーっ助かった！」

カミツレ「やれやれ！」

サスケ達一行はポケモンセンターについた。

サスケ「でっこれからどうする。」

フウロ「温かい。とりあえずキツサキ神殿に向かうんでしょ？」

カミツレ「そうね。キツサキ神殿の場所を聞いてみましょう。」

ジヨイー「いらっしやーい。」

カミツレ「突然で申し訳ないけどキツサキ神殿ってどちらの方向か
しらっ。」

ジヨイー「キツサキ神殿ならここより北に進んだところにあるわ。」

カミツレ「ありがとうございます。」

ジヨイー「その格好じゃ寒いでしょ。上着をあげるわ!」

カミツレ「わざわざありがとうございます。」

サスケ達は上着を羽織った。

サスケ「よし！行くぞ！」

サスケ達はキツサキ神殿の前まで来た。中に入ろうとするとこここの管理人かなんかの人が止めてきた。

管理人「ここより先はジムリーダーに認められた人しか入ることはできない。お引き取り願います。」

カミツレ「私はイッシュ地方ライモンシティジムリーダーのカミツレです。そしてこちらが」

フウロ「イッシュ地方フキヨセシティジムリーダーのフウロです。」

サスケ「うちはサスケだ。これの目印となる情報をここに探しにきた。」

管理人「なんと！ジムリーダー達にうちはですと！しかし、それならばここは場違いです。ここにはその水晶のためになる情報はありません。」

サスケ「何だと？」

管理人「私はあまり詳しくはないですがカナギタウンにそれについて詳しい方がいます。」

サスケ「そうか。」

フウロ「じゃあ明日はカナギタウンに向かいますよ。」

カミツレ「そうね。」

管理人「それと本当にあのうちはなら写輪眼を持つてるはずです。みせてもらえないでしょうか？」

サスケ「? 貴様!なぜ写輪眼のことを知っている。」

管理人「それは以前ここにうちはと名乗るお方がきたからです。」

サスケ「何だと?」

管理人「ここにはレジガスというポケモンが眠っているのですが、当時は暴れてまして、手がつけれませんでした。しかし、その時うちはと名乗るお方が写輪眼を使ってレジガスを眠りにつけさせました。そのお方がいずれうちはの者がまた来ると言い残して去っていきました。」

サスケ「…………… (一体だれだ。だがそうなるとマダラカイたちということか)……………」

フウロ「サスケ……………」

カミツレ「とりあえず今日はポケモンセンターに戻りましょう。」

サスケ「ああ。お礼だ。写輪眼！」

管理人「おお！それはまさしく写輪眼！ありがとうございます。」

サスケ「世話になった。」

フウロ「寒い！早く休みましょう。」

こうしてサスケ達は新たな情報を手に入れてポケモンセンターに戻った。
もうじきサスケの旅が終わるとも知らずに……
続く。

番外編 1 第十六話 キツサキシテイ（後書き）

次回は本編にも関わるほどの発言をサスケがします。

番外編 1 第十七話 カンナギタウン（前書き）

番外編です。

今回は本編に少し関わりがあるような発言があります。

番外編1 第十七話 カンナギタウン

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

キツサキ神殿へと向かったサスケとフウロとカミツレだったが、場違いだと管理人に言われる。そしてカンナギタウンに詳しい人がいるという情報をもたらした。

あらすじ了

サスケ達はキツサキシティを出て南に向かって歩き始めた。いまは雪が降り続く道を通っているところ。

サスケ「本当にこのまま行けば町があるのか……………」

カミツレ「確かにこんなところに町があるのかさへ疑わしい！」

フウロ「きつとあるわよ！」

それから1時間後、サスケ達はまだ雪道を歩いていた。

サスケ「おい、どういうことだ。全然町が見えない。」

フウロ「おかしいわね。そろそろ見える筈なんだけど……………」

サスケ「まさか……………写輪眼」

サスケは写輪眼を発動した。そして

サスケ「万華鏡写輪眼!!!」

サスケは万華鏡写輪眼を発動して幻術返しを使った。
すると

フウロ「景色が変わっていく……………」

カミツレ「あれは……………町？」

サスケ「やはりか……………」

フウロ「町だ。っていうよりなんであんな幻にハマってたんだろ。」

サスケ「恐らくうちはイタチかうちはマダラが俺らがキツサキを出るときに幻術をかけたんだろ。」

カミツレ「イタチとマダラ？あなた兄弟いるの？」

フウロ「それ私も初めてきく！」

サスケ「いや、兄はイタチだけだ。マダラは違う。」

カミツレ「じゃあおとうさん？」

サスケ「いや、それも違う。うちはこの一族の名前だ。確かに写輪眼はうちの血が流れていないと発動できない。だが、家族ではない！イタチは家族だがな。」

カミツレ「ふーん。うちは一族ねえ！」

フウロ「ちなみにうちは一族ってどれくらいの人数なの？」

サスケ「……………三人だ。」

カミツレ「さっ三人っておとうさんやお母さんは？」

サスケ「死んだ。……………少しだけ過去を話そう。」

サスケはカンナギタウンに入ってポケモンセンターを目指して歩きながらフウロとカミツレに自分の過去を話す。
ちなみに原作と違うのでご了承お願いします。

サスケ「うちは一族は前まではたくさんいた。だが、あの事件が起きてから全てが変わった。」

フウロ「あの事件？」

サスケ「ああ。それは暁海賊団に俺が入る前、うちの町は平和だった。だがある日、当時の王下七武海の1人が海賊を引き連れて攻

め込んできた。」

カミツレ「そんな……………」

サスケ「まだ小さかった俺でさえ覚えている。その海賊どもはうち
は一族を皆殺しするためにはるばる遠くからやってきたらしい。そ
して能力者がわんさかといいた海賊どもは俺の目の前で俺の友だちや
その父、母、俺の父、母を殺した。そして俺を殺そうとした時、俺
の兄イタチが助けてくれた。そして、うちの町に残ってた生き残
りは俺だけとなった。」

フウロ「ちよつと待って！生き残ったって海賊達は？それにマダラ
とイタチも生きてるんじゃない……………」

サスケ「ああ生きている。マダラは今だからわかるが、あいつはも
う100年以上生きている。」

カミツレ「百年って……………」

サスケ「マダラはうちの町の創始者とも呼ばれていたが町の人は嫌っていた。理由は分からんが、マダラを町から追放したらしい。その際マダラは海賊になった。それからしばらくしてマダラは海賊王ゴールドロジャーの船員になった。マダラについて知っているのはそれだけだ。」

フウロ「……………」

サスケ「そしてイタチは最年少で写輪眼を開眼した天才だった。だがイタチはやってはいけない事をしてしまった。」

フウロ「やってはいけない事？」

サスケ「それは万華鏡写輪眼の開眼。」

カミツレ「え？でもサスケだって万華鏡写輪眼を使えるじゃない！」

サスケ「ああ。だが万華鏡写輪眼を開眼させるには条件がある。」

フウロ「条件？」

サスケ「最も親しい者を殺すことだ。」

カミツレ「？」

フウロ「？」

サスケ「イタチは当時最も親しかったうちはシスイを殺し、万華鏡写輪眼を手に入れた。その後もうちは暗殺を繰り返して、町から追放。その後はロジャー時代に出来た暁海賊団に入った。ちなみにマダラもイタチが暁に入ると同時に入ったらしい。そして話は戻るが、イタチはうちの町が王下七武海率いる海賊団に襲われていると聞いてやってきたらしい。イタチはもちろん海賊達を皆殺しにした。そして残された俺を暁に入れた。」

カミツレ「でもサスケが万華鏡写輪眼を手に入れたのは？」

サスケ「それは俺の目の前で最も親しかった友人が死んだことによるらしい。そして暁に入った俺は真実を知った。」

フウロ「真実？」

サスケ「海賊達にうちは一族皆殺しの命令をしたやつがいた。」

フウロ「命令？王下七武海？」

サスケ「いや、世界政府だ。世界政府はうちの持つ写輪眼を恐れたいらしい。それで世界政府は王下七武海にうちは一族抹殺の命令を下した。」

フウロ「そんな……………」

サスケ「その話を聞いた俺は憎しみにかられた。もちろんマダラもイタチもな。そしてその憎しみをはらすために出始めに海軍本部を

暁海賊団で攻め落とし、インペルダウンを崩壊！極悪犯罪者を放出。さらに政府が持つ国を破壊して俺ら暁はみんな億超えの賞金首となった。そしてうちの持つ恨みはまだはれていない。これがうちの過去だ。」

カミツレ「そんなことが……………」

フウロ「（復讐者か……………だからサスケはあの時殺すつもりで）」

長老「話は聞かせてもらった。」

サスケ「！！！！（俺が気配に気付かなかった！！！！）」

カミツレ「あなたは？」

長老「わしはこの町の長老じゃ。名前は……………とつこの昔に忘れたわ。それにしてもうちの生き残りがおまえさんだったか。」

サスケ「でっあんたは何をしに来た？」

長老「何、ワシに会いに来たんだろう？（サスケよ。）」

サスケ「ああ！これについて知っているか？」

サスケはしらたまを出した。

長老「おお！知つとるよ。これは空間ポケモンパルキアが持つと言われておる物じゃ。」

サスケ「でっパルキアはどこにいる。」

長老「パルキアはあそこにそびえ立つテンガンザンのやりのはしらと一緒のところにおる。だが、やりのはしらへの道は自分で探すんじや。」

サスケ「……………そうか。それだけ聞ければ問題ない！行くぞ。フウロ。カミツレ。」

フウロ「うん。」

カミツレ「ええ。」

サスケ達はテンガンザンに向けて出発した。その背中を見つめる長老。その表情は笑顔だった。

長老「（サスケよ。大きくなったな。全くさすがはわが親友イタチの弟だけはある。俺がこの異界の地に訪れて90年！長生きはするもんだな。）」

サスケは気付かなかったがこの長老の背中にはうちのマークが描かれていた。そしてこの物語はもうじき幕を閉じる。続く。

番外編 1 第十七話 カンナギタウン（後書き）

もうじきで番外編が終了いたします。

番外編 1 第十八話 テンガンザンやりのはしら(前書き)

番外編です。

次回は最終回です。

番外編 1 第十八話 テンガンザンやりのはしら

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

カナナギタウンに幻術を解いてやってきたサスケ達。そこでサスケはフウロとカミツレに自分の過去とうちにはについてを語った。その時この町の長老が現れて、パルキアの居場所を教えてくださいました。そしてサスケ達はテンガンザンへと向かったのだった。

あらすじ了

テンガンザン

サスケ達はテンガンザンに入り、上へ上へと目指していった。その道中は険しいものだった。

急に吹雪がふいてきたり、あられが落ちてきたり、雨がザーザーふってきて雷はそこらへんに落ちて、いろいろな自然現象がサスケ達を襲った。

それも上に登っていくたびにヒドくなっていた。

だが、サスケ達はそれがヒドくなるにつれてどんどん近づいていることを実感していた。

サスケ「もうちょっとだ。お前たち頑張れ。」

フウロ「うん。」

カミツレ「まだまだきつと上ね！」

サスケ達はどんどん上に登っていく。

そして結構な高さまで登った時、全ての自然現象が止まった。いや、あたり一面が空。雲は遥か下のほうにあった。

風もふいていない！気温も普通。

何より無音！

まるで宇宙にきているかのような錯覚に陥ってしまいそんな感覚にサスケ達はなっていた。

サスケ「静かだ………あたり一面が空。そしてこの先に恐らく最後の階段がある。もうじきでやりのはしらだ。」

フウロ「何か心臓がドキドキする。こんなに高ぶるなんて初めて！」

カミツレ「それは私もよ。今までテレビに出たりモデル業もやってきたけど、こんな感覚は初めて！しかもこの先にある階段が長いってことは恐らく最後の階段！私たちの人生で最初で最後の体験にな

る。」

サスケ「……………行くぞ。」

フウロ「うん。」

カミツレ「ええ。」

サスケ達は長い長い階段を登っていく。その階段はまるで宇宙にながっているように長い！

どんどん高く登り、あたりが少し暗くなってきた。恐らく宇宙が近いんだろう。

そして階段の終わりが見えてきた。

サスケ「終わりが。」

フウロ「ついに終わり。」

カミツレ「やっと到着。」

そしてサスケ達が見たものは想像を超えるものだった。周りは暗く、まるで夜みたいだった。そしてさらに空高くそびえるやりのようにのびた柱がたっていた。

サスケ「ここがやりの柱！」

フウロ「ここにパルキアがいるのね！」

カミツレ「でも会えるのかしら？」

サスケ「……………」

サスケはさらに奥に進む。

その地面には丸い魔法陣みたいのがかかっていた。サスケは懐からしらすたまをだして魔法陣の上に立ちしらすたまを空に掲げてこついった。

サスケ「おいパルキア。俺はこの世界に飛ばしたお前に会いに来た。とっとと姿を見せろ。」

サスケは写輪眼を発動して言った。

フウロとカミツレは近くで見守っている。

するとサスケの近くの空間がねじれた。サスケはフウロとカミツレがいるところまで下がった。

ギヤアアアア

ねじれた空間の中から鳴き声が聞こえる。

サスケ「ついに来たか。」

フウロ「……………ゴク」

カミツレ「いよいよね」

さらに空間がねじれてポケモンの頭が出てきた。そしてそのポケモンは周りを振動させながらどんどん出てくる。そしてそのポケモンは完全に空間から出てきて、ねじれも消えた。

サスケ「お前がパルキアか！単刀直入に言う。俺を元の世界に戻しやがれ。」

ギヤアアアア

パルキアは後ろにねじれた空間を作り、その中に入っていくようにした。

サスケ「なっ待て！」

だがパルキアはねじれた空間に入って姿を消した。
が、ねじれた空間はそのままだった。

フウロ「もしかしたらついてこいって言ったんじゃない?」

カミツレ「うん。恐らくそうね。どうする?サスケ君!」

サスケ「決まっている。やつを追いかける。でなければここまで来た意味がない!行くぞ。」

カミツレ「ええ。」

フウロ「うん。」

サスケ達はパルキアが通った後のねじれた空間に入ってしまった。サスケ達はそのねじれた空間に入った後、ねじれた空間は消えた。そしてサスケのこの世界での最後の物語がやってくる。
続く。

番外編 1 最終回 第十九話 シント遺跡……サスケ最後の戦い……そ

番外編最終回です。次回から第二章空島編です。それと更新ペースがめちやくちや遅くなります。ご了承ください。

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジ
ヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。
男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

前回までのあらすじは

サスケ達はテンガンザンに登りやっとの思いでやりのはしらについ
た。そこでサスケ達は空間の神と言われるパルキアと出会う。しか
し、パルキアは突如別の場所に移動した。
そしてサスケ達はその後を追うのだった。

あらすじ了

シント遺跡

サスケ達はパルキアが通ったねじれた空間に飛び込んでついた先はさっきとは全然違う遺跡みたいなどころに来ていた。

サスケ「ここは？」

フウロ「私にも分からないわ。」

カミツレ「だけど外を見てみて。」

サスケ「雪？」

カミツレ「恐らくここは北のどっかにある雪山の中にある遺跡ね。」

フウロ「なあんだ〜！せっかくあんなに苦労して登ったのに〜！」

サスケ「だが何故場所を移動したんだ……………」

その時

???「ここはシント遺跡！そしてここが世界の始まりの場所でもある。」

サスケ「なっ！！その目は……………輪廻眼！」

フウロ「輪廻眼？」

サスケ「ああ。輪廻眼は暁の船長が宿している目！そして輪廻眼とは神の能力を持つ目と言われている。」

カミツレ「神の能力！」

六道仙人「そう。俺は六道仙人！初めて輪廻眼を宿したものだ。」

サスケ「？六道仙人！だと………だがそれは大昔の話だ。」

六道仙人「確かに俺は大昔に生きていた。これは思念体だ。」

サスケ「そうか。でっここにいるということは何かあるということか。」

六道仙人「ああ。察しいいな。お前にはこれからあそこでパルキアと戦ってもらう。それでパルキアを屈服させてお前の口寄せ獣としろ。」

サスケ「口寄せだと……！」

六道仙人「屈服して口寄せ獣として契約すればパルキアを呼び出せて世界を渡るのも可能になる。つまり、お前は元の世界に戻れるということだ。」

サスケ「……………いいだろう。その勝負受けて立つ。」

カミツレ「頑張れサスケ！」

フウロ「頑張つてサスケ！」

サスケ「ああ。」

サスケは丸い魔法陣みたいのがたくさんかかれているところに来た。そしてこれからパルキアとの戦いが始まる。

ギヤアアアア

サスケの持っていたしらたまはパルキアと合体した。

そして戦いが始まった。

うちはサスケ v s 空間ポケモンパルキア

パルキアはりゆうのはどうを撃ってきた。サスケはそれを避けて火遁豪火球を使うも叫び声だけでかき消されてしまった。さらにサスケは千鳥流しやいろいろな術を使うも全く効いていなかった。

サスケ「くそっ……………全く効かねえ。流石は神と呼ばれるだけはある。なら、これはどうだ。口寄せの術」

サスケは口寄せの術で大蛇を呼び出した。そしてその大蛇は口から大量の蛇を出して津波のようにパルキアに向かってだした。

だが、パルキアはあくうせつだんを使い、その蛇達を一瞬で消した。だが、サスケはそれが分かっていたかのようにパルキアの周りにク

ナイに起爆札をたくさんつけて起爆させた。
これでサスケは勝ったと思ったが、パルキアはまだ立っていた。
それどころかパルキアは叫び声と共に爆風を吸い込んで、サスケに
特大級のはかいこうせんを放とうとしていた。

サスケ「何!!!!!!」

サスケはとっさに写輪眼を発動させたが、パルキアのはかいこうせんが同時に飛んできた。

サスケ「(くそっ間に合え……………)」

ドュゴオオオン

はかいこうせんはサスケを飲み込み、爆発した。

フウロ「サスケ……………!!!!!!」

カミツレ「サスケ〜!!!!!!」

フウロとカミツレはさげんだ。

サスケ「俺はまだ生きている。切り札は最後までとっておくものだ。」

フウロ「?あれは!」

カミツレ「知っているの?」

サスケ「スサノウだ。」

サスケはスサノウを発動させてパルキアの攻撃を防いだ。
パルキアは自分のはかいこうせんが防がれたことに驚いていた。

サスケ「これが必要ならば俺はやられていた。本番はここからだ。」

サスケはまたまたイタチのセリフをパクった。

サスケ「今度はこっちの番だ。」

サスケはスサノウの持つ剣でパルキアを攻撃する。

だが、パルキアは腕でガードしてりゆうのはどうを放つ。

だが、スサノウの盾の前ではその攻撃は無意味でパルキアの攻撃はまったくダメージを与えていなかった。

サスケ「スサノウの前ではどんな攻撃も通用しない。終わりだ。パルキア」

ギヤアアアア

パルキアは吠える。

サスケはトドメといわんばかりに剣を振り下ろした。
その剣が当たる直前にサスケはスサノウをとめた。

サスケ「……………前にも確かこんなことが……………」

ちなみに今回はフウロもカミツレもスサノウの剣が振り下ろされる
場所に出てきていない！

殺しはダメだよ。サスケ！

サスケの頭の中でそれが響いた。

サスケ「……………」

六道仙人「どうした。何故トドメをささない。」

サスケ「……分からない。だが、殺せなかった！ただそれだけだ。」

フウロ「サスケ……………」

カミツレ「……………」

サスケはスサノウを解いた。
それを吉と思ったパルキアはサスケにドラゴンクローを放った。
だが、サスケは抵抗しない。まるでその攻撃を受けいるかのよう

フウロ「サスケ……………逃げて……………」

カミツレ「サスケ！！！！！！！！」

パルキアのドラゴンクローがサスケにふりおろされた。
サスケは貫かれた。だが

サスケ「（痛くない？）」

六道仙人「……………合格だ！」

サスケ「何！！」

フウロ「え？」

カミツレ「？」

六道仙人「この戦いの意味……………それはパルキアを戦いを通して受け入れること。それがこの戦いの屈服の意味。そしてそれがパルキアを口寄せ獣として呼び出すための契約だ！」

サスケ「つまりあなたは俺がこいつの主になんかさわしいかどうか試した訳か。」

六道仙人「そういうことだ！しかし、よく気がついたな。」

サスケ「俺の万華鏡写輪眼をなめるな。スサノウでこいつに触れた時、こいつからは幻のオーラが漂っていた。つまりこいつは実体ではない。まあ俺の体が貫かれるまでは分からなかったがな！」

六道仙人「ほうそこまで気づいていたか。さすがはうちは一族！」

サスケ「これで俺はパルキアを口寄せできるようになった。これで帰れるわけか。」

六道仙人「ああ。それ以前にお前はパルキアの力を使わなくても元の世界に帰れる！」

サスケ「？かつ体が！！！」

フウロ「サスケの体が消えていく!!!」

カミツレ「いったい……………」

六道仙人「実はな。お前がパルキアを口寄せできるようになったからパルキアの空間移動能力の効力がきれたんだ。」

サスケ「どういうことだ!」

六道仙人「いくら空間ポケモンのパルキアでも異世界の住人を永遠においておくことはできない。だからお前は何もしなくても一年間たてば元の世界に戻れた。まっそうなったら試練不合格だな。だがお前は見事にパルキアを屈服させた。だからこの世界に長居する必要はない。そして、屈服したと同時にパルキアはお前にかけていた空間移動能力を解いたんだ。そして後3分もすれば元の世界に戻る。そう。お前の任務は初めからパルキアを口寄せ獣にするための任務だったということだ。」

サスケ「そうだったのか……………」

フウロ「サスケ……………」

カミツレ「サスケ……………」

サスケ「お前たちももうここで別れだな！短いようで長かった旅！なかなか楽しめた。いろんなポケモンと出会い、触れ合い、いろんなことがあった。俺がここまでこれたのもフウロ。カミツレ。お前たちのおかげだ！ありがとう。」

サスケはフウロとカミツレに礼を言った。

フウロ「……………本当にお別れなんだね……………私……………ここまで旅してきたこと……………絶対に忘れない。」

カミツレ「私も。ライモンシティの観覧車からここまでの旅だったけど、こんなに胸がおどるような旅は初めてだった。ありがとう。サスケ」

サスケ「ああ。俺もあんたらのことは忘れない！絶対にな」

フウロ「向こうの世界でも……………元気で……………元気でいてくれれば私は……………」

カミツレ「フウロ……………」

サスケ「……………」

フウロとカミツレは泣きながらサスケに旅の思い出を語った。そしてそろそろサスケの体が消えていく時、

フウロ「サスケ……………私は……………私はあなたのことが……………」

サスケはそこまでしか聞けなかった。そしてサスケが最後に言い残した言葉は

さようなら。

そして場所は戻り、グランドライン冬島のとある家の中

そこに一人の男が眠っていた。そう。サスケである。

???「おい、サスケ！しっかりしろ！サスケ！」

サスケ「……………ウツウツ……………」

サスケは目を覚ました。

サスケ「ここは……………」

香燐「おおサスケ無事だったか。心配したぞ」

水月「本当だよ。サスケ！ここで一体何があったんだ？」

重吾「だが無事で何よりだ。」

サスケ「ああ。重吾に水月に香燐か……………心配かけたな。」

香燐「本当だよ。心配かけさせやがって。」

水月「でっ何があったんだ？」

サスケ「夢……………」

水月「夢？」

サスケ「ああ夢だった！」

水月「うん。まあよくわかんないけど無事で良かった。」

サスケ「ああすまない。……………（これは！……………）
そうか。あれは夢ではなかったか」

水月「サスケ？」

サスケ「いや、何でもない。行くぞ。次の俺らの任務は空島だ！」

こうしてサスケの異世界での旅は終わった。それが現実か夢かは本人にしかわからない。
だが、サスケの旅はこれからも続くのだった。

番外編1おしまい。次回はついに第二章突入。お楽しみに！

第二章 空島編 第二十話 次なる目的（前書き）

久々の更新です。

今回から第二章です。めっちゃくちゃ短いです。

第二章 空島編 第二十話 次なる目的

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男。海賊王ゴールドロジヤー！彼の放った一言は男達を海へ駆り立てた。男達は夢を追い求め今日もグランドラインを突き進む。

ついに第二章空島編の始まりです。
では、ゆっくりしていきましょう。

暁海賊団の船の中

長門「サスケ。お前に任務を与える。」

サスケ「任務？」

長門「ああ。サスケには空島に行ってもらいたい。」

サスケ「空島だと！！確かあそこはマダラとゼツの担当の筈だ！何故俺が行く必要がある。」

長門「ああ。だがマダラとゼツの主な任務はあれの守護。今回の任務には回せない。」

サスケ「なるほど。そうになるとエネルの始末か？」

長門「いや、違う。エネルはすでに我らの一員だ。今回はエネルではない。」

サスケ「では何なんだ？」

長門「実は今、空島に金獅子のシキ率いる海賊団が来ている。そいつらの抹殺。それが任務だ。」

サスケ「待て！金獅子のシキといえばロジャー時代の海賊！確かインペルダウンにいたはずじゃ……………」

長門「シキは俺らがインペルダウンを崩壊させた時、逃げた。だが、今は厄介なことに空島にいる。我らのあれをあいづらにバラすわけにはいかない。だからサスケ達に始末を頼む。」

サスケ「ああ。分かった。」

長門「だが気をつける。シキの後ろに黒幕がいる。」

サスケ「黒幕……………ああ注意しよう。では言うてくる。行くぞ。香燐、水月、重吾！」

水月「はいよ！」

香燐「おう。」

重吾「ああ。」

長門「（何もなければいいがな）……………」

そしてサスケ達は小型の船に乗り出発した。新たな任務を掲げて！

お知らせです。(前書き)

しばらく更新出来ませんが時間がとれしだい更新していきます。

お知らせです。

ピンポーンパーンポーン

お久しぶりです。

なかなか小説が更新出来ないこと誠に申し訳ありません。
いろいろと忙しく、小説を書く時間がなかなかとれません。

次にいつ更新できるかも分かりません。この小説を気に入ってくださってる方には大変申し訳ないと思いますがご了承承お願いいたします。

また、時間がとれしだい小説を書いていきますのであしからず。
そして小説の内容としては原作とはかけ離れるのでご了承承お願い
します。

お知らせは以上です。

ピンポーンパーンポーン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916w/>

ワンピース！大海賊団暁暴れる。

2011年10月5日20時56分発行